

多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の 地名とその由来に関する調査・研究

2002年

中村文明

多摩川源流研究所所長

目 次

(1) 今回の調査・研究の目的	1
(2) 小菅村の位置と概況について	2
(3) 「多摩川源流絵図」小菅版の特徴について	3
① 石川副会長が精魂を込めて	3
② 「源流絵図」小菅版の特徴	3
③ 特徴的な地名の由来	4
(4) 地名研究を修めることの意義	7
□ 全国的に共通する命名方法	7
□ 地名の分類について	7
(5) 自然地名の成り立ち	9
□ 川にちなんだ地名	9
□ 野原にちなんだ地名	10
□ 谷や沢にちなんだ地名	10
□ 荒地にちなんだ地名	10
□ 窪地と台地にちなんだ地名	11
□ 峠にちなんだ地名	11
□ わき水にちなんだ地名	11
□ 海岸にちなんだ地名	12
(6) 文化地名の成り立ち	12
□ 田にちなんだ地名	12
□ 村の発展を表す地名	13
□ 開墾に関する地名	13
□ 神社や寺院に関する地名	14
□ 八幡信仰に関する地名	14
□ 天神信仰に関する地名	14

□ 熊野信仰に関する地名	15
□ 稲荷信仰に関する地名	15
□ 諏訪信仰に関する地名	15
□ 四天王信仰、不動信仰に関する地名	16
□ 観音信仰、菩薩信仰に関する地名	16
□ 聖徳太子信仰に関する地名	16
(7) 小菅村の地名と由来の調査	17
□ 小菅村における調査の経過	17
□ 小菅村の滝、淵等の名称と由来	18
□ 小菅村の小字の名称とその由来	26
《東部》(余沢・大成・金風呂)	26
《白沢地区》	28
《小永田地区》	29
《中組地区》	32
《田元》	34
《川池》	36
《橋立》	37
《長作地区》	40
□ 小菅村の沢とその由来について	43
① 小菅川左岸	43
② 小菅川右岸	45
《白沢》	48
《長作地区》	48
謝 辞	50
資料 1. 写真	51
資料 2. 「多摩川源流絵図」(本編はカラー).....	79

(1) 今回の調査・研究の目的

大地に刻まれた地名は、太古の昔から生きてきた人間の生活と文化を託した歴史の証人であり、人間の最も優れた伝承の一つである。源流の人目に付かない奥地で流れ続ける滝の名称一つにも、先人たちの自然への深い思いが込められている。

今回の調査・研究の目的は三つある。目的の第一は、多摩川源流域の淵・滝・沢・尾根・小字等の地名とその由来の聞き取り・記録・保存・継承である。今回の調査対象の小菅村は、縄文時代の石器が発見されるなど歴史は古く、また鎌倉時代の建築様式の繊細で優雅な長作の観音堂が大切に保存され、神楽、獅子舞など民俗芸能も各地区に息づいている。現在、地区精通者の高齢化が進行し、淵や滝、小字等に込められた地名とその由来が記録されないまま消え失せてしまう恐れがある。今なら、できる条件は整っている。

目的の第二は、調査・研究の成果を「多摩川源流絵図」小菅版として完成させ、郷土学習・自然体験学習の教材として活用する道を開くことである。「多摩川源流絵図」塩山・丹波版の反響は大きく、山梨県内はもちろん、多摩川流域全体に波紋を広げ、多摩川源流への注目を集める上で大きく貢献した。

目的の第三は、「多摩川源流絵図」の三部作を完成させることである。塩山・丹波版に続いて小菅版をまとめ、さらに「源流絵図」奥多摩版を仕上げる事が出来れば、多摩川源流域全体を網羅した源流絵図が完成することになる。小菅版完成は、全体の間隙に位置するが、三部作完成への大きな励みになる。また、2年後に奥多摩版が仕上がれば、奥多摩は東京の奥座敷として関心は強く、その完成は大きな反響を呼ぶであろう。

今回の小菅村における地名の調査に取り組んで、地名の生まれてきた背景、地名の変遷、地元の方々の地名への思いなどに直接触れる機会を得た。とりわけ、故郷の地名は、人間が生まれ育つ生活環境そのものであり、人間は成長とともに地名との新たな出会いが広がり深まっていく。地名もまた、人間の生活と暮らしの広がりに合わせてその量を拡大し、一年一年と増していった。人間の歴史はそのまま地名の歴史と重なる関係にある様に思える。身近な地名の一つ一つに人間の生活や文化、歴史や経済が織り込まれているのだ。

多摩川源流域に、広大な都水源林が広がっている。一世紀に渡り、当局者によって大切に管理されてきたために、手つかずの自然が広範に残されてきた。と同時に、この源流域には、地名とその由来研究を通して感じたことだが、古代から生きてきた人間の生活体験の原点が色濃く残されている気がしてならない。

(2) 小菅村の位置と概況について

初めに小菅村の位置と概況に関して紹介する。小菅村は、山梨県の東北部、大菩薩嶺の山岳地帯に位置し、北は丹波山村、西は塩山市、南は大月市と上野原町、東は東京都奥多摩町に接し、東経139° 北緯35° 48′ で標高660m、四方を1,300m～2,000mの高山で囲まれている。

村の総面積は52.65km²で、その95%を山林が占め、農耕地は1.2%、居住地域0.3%と極めて少なく、地形も平均勾配40°の急傾斜地であり、大菩薩嶺に源を発する多摩川水系の小菅川に7集落、鶴峠を越えた相模川水系の最上流の鶴川沿いに1集落が点在している。小菅川をはさむ急峻な秩父多摩山系の山々に囲まれているため、最寄り駅のJR青梅線奥多摩駅まで21kmという、僻地で峡谷型の山村である。

集落は、主として小菅川流域にわずかに開けた平坦地を中心に展開しており、農耕地は緩傾斜地に集中し、こんにゃく、そば等の栽培に適している。また、峡谷より湧出する清流を利用して、古くからわさび栽培や溪流魚の養殖が盛んである。

村の歴史的な推移をたどってみると、すでに縄文中期に生活が営まれていたと思われる跡が認められている。奈良時代(710～784)には文化も栄えたらしく、藤原重清により宝生寺が建てられ、その子孫小菅遠江守が天神山に築城し、ここを中心に村づくりがなされ今日に至っている。また、国の重要文化財に指定されている「長作観音堂」は、織細で優雅な鎌倉時代の建築様式をしており、同様の建築は全国にも愛知県吉良町にあるだけでその存在は貴重である。

本村は、東京都に隣接しているため、生活は東京都との結びつきが非常に強く、生活物資の大半が東京都から流入し、東京への通勤者も多い。また、明治34年以来、村内に都水源涵養林が広範に広がっている関係から、東京都民の水源の村として清い水を守り続けられるよう東京都の援助をいただき、昭和57年に下水道事業に着手し、平成6年度末には、村内下水普及率は100%となっている。

基幹産業は農林水産業であるが、内水面漁業を除いては小規模経営で、高齢化、後継者不足により経営環境は厳しさを増し、従事者、生産者共に漸減傾向にある。今後、村の自立と発展の核は、首都圏に隣接し、豊かな自然に恵まれている当村の有利さと、山村としての特性を生かした農林水産業とが連携した観光振興にあると考えている。

そのため、平成13年4月、小菅村は源流にこだわった村づくりを推進していく目的で多摩川源流研究所を設立した。源流研究所は、源流と流域との交流を活発化させることを通して村の活性化を図ろうと、「多摩川源流体験教室」「源流・大菩薩探訪の旅」「源流古道・水源林体験の旅」などを企画し、流域の市民を小菅村をはじめ源流域へ

に迎える体制を整えている。さらに、源流の自然、歴史、文化などの資源に着目し、その資源の調査・研究、データの蓄積を図るとともに、その成果と源流に関する情報を流域に発信して、源流に対する流域の市民の関心を惹起している。源流に調査研究の拠点、情報発信と交流の拠点が築かれたことは、源流の歴史に新しい扉を切り開いたといえよう。

(3) 「多摩川源流絵図」小菅版の特徴について

① 石川副会長が精魂を込めて

この調査研究の目的の一つであった「源流絵図」小菅版が、2002年5月1日に完成した。淵や滝、小菅村の小字などの調査と平行して、多摩川源流観察会の石川重人副会長に、前回の塩山・丹波版と同様に絵図の作成をお願いした。石川副会長に小菅に足を運んでもらい、全体の印象を掴んでもらいながら、精魂を込めて作成して頂いた。私の方は、一つ一つの橋の写真や源流の山々の姿、集落毎の特徴を繰り返し写真に収め、正確さを大切にしていた。昨年の11月から絵図の下書きに入ってもらうが、イメージ通りの形が出来上がらずに、数ヶ月があっという間に過ぎていった。

今年の3月の半ばに最初の絵図が出来上がった。それに淵や滝を書き込み、尾根や沢、地区名などの名称と地名を書き込んでいく段取りだったが、前回は、カラーコピーに書き込んでスムーズにことが運んだが、カラーコピーだと原版の印象が崩れてしまうという石川さんのこだわりで、今回は、原版に直接書き込むことになり、大変な困難が待ち受けていた。原版がセロハンだったので、脂でペンの色が乗らないのである。源流観察会の雨宮清貴事務局長、源流研究所の佐藤英敏事務局長、それに妻の中村真里の三人掛かりでようやく書き込んでいくことが可能になった。多くの方々の協力と支援のおかげで「源流絵図」小菅版がこうしてついに出来上がった。

② 「源流絵図」小菅版の特徴

「源流絵図」小菅版の特徴の第一は、小菅村に所在する滝、淵、沢、尾根などの名称とその由来の調査・研究が大きく進展したことである。

滝に関しては、

大成滝、白沢滝、奈良倉滝、大白沢の一番滝、二番滝、三番滝、ヤチグラの滝、棚倉の滝、白糸の滝、雄滝、鳥小屋出合い滝、妙見五段の滝、天狗の隠れ滝、観音滝（音無の滝）

等が確認できた。

淵に関しては、

ツリガネ淵、テンゴウ淵、古橋場の淵、釜ッ淵、桜淵、コンコツ淵、浅間淵、精進淵、マキムシバの淵、梅おじー下淵、キネッコ淵、蛇石淵、白沢出合い淵、平山淵、ドウドコロ淵、まがり淵、お安淵、矢花淵、三太郎淵、センゴリ淵、清水淵、山の神淵、棚倉出合い淵、ナガトロ淵、釜ッ淵、丸淵、赤沢出合い下淵、たわむれ淵、釜淵、のぞき淵、瞳淵、鳥小屋淵

等（滝・淵48ヶ所）を実踏調査してきた。

沢に関しては、

大成沢、大茶沢、棚沢、桃ノ木沢、竹ノ沢、獅子倉沢、カズ久保沢、前沢、西沢、竹の貝、小沢、田口沢、大田倉沢、中黒茂沢、儀助沢、白糸沢、今倉沢、赤沢、布小屋沢、花ノ木沢、矢下沢、日向沢、鳥小屋沢、フルコンバ沢、山入沢、金場沢、大谷沢、紅葉沢、見晴沢、熊沢、アシ沢、熊切沢、ナッチ沢、井狩沢、山沢、ミヨリ沢、ナガサス、クジラ沢、棚倉沢、マサキ沢、カリバ沢、平山沢、大部活沢、シオジクボ、カルメクボ、アカドチ沢、玉蝶沢、シンナシ沢、天狗棚沢、熊棚沢、棚沢、シラベ沢、発沢、大白沢、奈良倉沢、ナカノサス、釜土沢、ハナオリド、小米沢、井戸沢、秋切沢、大長作川、神楽沢、コヤケ沢、オキノカヤ

等（65ヶ所）が判明した。

「源流絵図」小菅版の特徴の第二は、小菅村の8地区にある114の小字に関する地名とその由来に注目したことである。小菅村の東部（12）、白沢（9）、小永田（18）、中組（13）、田元（12）、川池（12）、橋立（18）、長作（20）の各地区を回り、長老や地区精通者に地名に関する由来を聞いた。今回の調査で、村にあるすべての小字に関して調査・研究できたことは、これからの本格的な地名研究の基礎を築く大きな成果だった。

③ 特徴的な地名の由来

もちろん、調査の期間も限られており、また専門的知識に乏しいなかで不十分や不正確さをあえて承知の上で、地区精通者への聞き取りを基本に、自らの判断でいくつかの地名の謎解きに挑戦した。その特徴的な地名を幾つか紹介する。

東部地区・余沢に「大成」と呼ばれる地名がある。大成は昔富士講の通り道にあたり賑わいを見せていた。大寺、小寺、比丘尼寺と小さな集落に三つの寺が建ち並

んだ。ここは山間の緩やかな傾斜地にあたることから、ナルい傾斜の土地という意味で大成と名付けられたのであろう。

長作地区に「牛飼」という面白い地名がある。ここで地元の方が牛でも飼っていたのであろうかと思い、地元の長老に聞いた。その長老はその土地を「牛会」と表記していた。言い伝えによれば、小菅村と隣の西原村との境を決めるのに、双方の村から牛を歩かせ、その牛が出会ったところを境にするという取り決めが成立し、その結果現在の境界が出来たという。牛が出会ったところ、「牛会」が「牛飼」に変化したのであろう。地元では、「ウシゲエシ」・牛返し、つまり牛が出会って引き返したところという別名で呼ぶ人もいるように、もともとは、「牛会」が正解であったと思われる。

中組地区・山沢に「タノモクリ」とよばれる小高い土地がある。地元の人に聞いてもその意味が不明であった場所である。この調査が終わりに近づいた頃、村の長老に聞きに行った。長老も「タノモクリ」の意味を図りかねていたが、長老はその場所を「タナモックリ」と呼んでいた。この大地は三段の棚から成り立っており、上の二段に集落が形成されている。近くで見ると読みとれない地形の特徴をどこか高い場所から判断して、段々と続く高地の一番上に盛り上がったところがある様子を「タナモックリ」と呼んだのであろう。その「タナモックリ」が、いつの間にか「タノモクリ」に変化したのであろう。

白沢地区に「降矢戸」という地名が残されている。一見すると矢が降るという印象から昔の合戦場の近くではないかと想像をかき立てられたが、地元の方は、「フリヤード」と呼んでいた。昔ここは富士講の通り道として賑わっていた。旅人がくつろぐ宿屋や酒屋もあった。旅人が利用した「古宿」があり、そのフルヤドが「フリヤード」に訛り、「降矢戸」の漢字が当てられたのであろう。

同じく長作地区に「秋切」という地名がある。昔山仕事といえば、材木の切り出し、炭焼き、焼き畑などが主であったが、この土地を流れる秋切沢の周辺は日陰の場所も多く、炭焼きなどの山仕事を秋までに切り上げて一段落を付けることから、この名前が生まれたのであろう。源流域の冬は厳しく、日陰での仕事は、体の芯まで冷えて体を痛めることから次の世代へのメッセージを地名に刻んだのであろう。

同じく長作地区に「打越」という地名がある。村の中の小高い峠になっていて十文字に向かう人々の一休みする小さな平地を形成している。ここに面白い逸話がある。昔、タバコの火を付けるのに火打ち石を利用する人がいた。その火打ち石は、この地区のコヤケ谷の赤石が使われた。この赤石は固くて強かったので、この赤石を打ってたばこに火を付け、一服し峠を越えたという。打ち腰しにひっかけてこの

地を偲ぶ人の優しさがにじむ地名である。

田元地区に「腰越」という地名がある。川を越すのに橋が架かっていない時代に腰まで浸かって対岸に渡ったことからこの名前が生まれたのであろう。全国的には、山の麓から少し離れた場所に、腰を低くした様子の低いところを越えていくことから「腰越」と呼ばれる地名が残っているが、この地はこのケースに当てはまらない。

川池地区に「獅子倉」という地名がある。この地区には、伝統的に獅子舞が継承されているので、これにちなんだものかと思ったが、部落の周辺の危険な場所に「しし」という地名がつけられたようだ。この山の中腹には、アラクラという沢があるなど、地崩れしやすい土地柄を示している。古代人は、地名に様々なメッセージを託している。

「源流絵図」小菅版の特徴の第三は、この絵図を作成するための実地調査の過程で小菅村の新しい宝物である妙見五段の滝に出会えたことである。一昨年春、小菅村の嶋崎新吾さんと小菅川の実地調査に出かけた折りにこの滝と遭遇した。新吾さんの話によれば、「地元のものには滅多にここまで足を踏み入れることはない。ここを通る猟師や釣り人は、上流に向かう際、右岸の岩をヘツリながら登るので滝全体を眺めることはなかった」という。そのため、この五段の滝はその存在を知られることなく現在に至った。こんな素晴らしい滝に名前がないとは信じられなかったが、繰り返し長老を訪ねその名前を調査したが、やはり名前はなかった。廣瀬村長や古家助役から、「この滝にふさわしい名称を考えて欲しい」と頼まれたので、「妙見五段の滝ではいいがですか」と提案し了承された。最も存在感のある滝の名前の付け方に三つある。一つは、その谷の代表する優れた滝との意味合いからその谷の名前を付ける場合がある。二つ目は、その滝がいかに神秘的で神々が宿る雰囲気漂わせている場合、不動滝と名付けられる。三つ目は、その川の源頭が由緒ある場所である場合、その源頭の名前を滝に付ける。小菅川の場合、その源頭は、大菩薩嶺の妙見の頭（標高1975m）である。ここには、「北斗妙見大菩薩」の碑が建立されており、大菩薩という山の名前の由来にも関わる由緒ある場所である。こうした経緯から、この「妙見五段の滝」は、小菅川の源頭である大菩薩嶺の「妙見の頭」の「妙見」を頂き、この名前が生まれたわけである。

(4) 地名研究を修めることの意義

□ 全国的に共通する命名方法

前回の1999年版「多摩川源流絵図」塩山・丹波山版作成にあたっては、多摩川流域にある滝や淵等に関して、地元の長老に聞き取り調査への協力を依頼し、得られた情報をもとに現地を訪れてその一つ一つを確認しながら絵地図を作成していった。現在存在している滝や淵を確かめる作業は、周辺の地形が極めて厳しく近づきたい個所が多数あったために困難を極めたが、淵や滝の名前の由来に関する調査自体は、聞き取りが基本であった。

ところが今回は、滝や淵、沢等の調査・研究に加えて、小菅村の八地区にある114の小字とその由来の調査・研究を重要な課題として挙げたため、地元での地名の聞き取り作業を進めつつ、それ以外にも地名に関する基礎的な知識が求められることとなった。

例えば、小菅村にある奈良倉山の「奈良」は、ナラの木が繁茂していたことから名付けられたものというわけではなく、「ゆるやかな」という意味をもつ「なるい」という言葉からその由来はきている。実際、その山は起伏の少ない穏やかな形状をしている。また、大昔、大寺、小寺、比丘尼寺の存在した「大成」の「成」は、傾斜地を意味する。確かに「大成」は傾斜地にできた集落にはかならない。

このように、小菅村にある地名は、全国的に共通する地名の命名方法の影響を受けているし、またその地名のある地域のみならず日本全体の歴史や文化とも大きく関係することから、地名の意味や地名の分類、全国的な地名研究の現状と到達点等に関する基礎的な地名学の理論の修得が今回の調査のいわば前提となった。

ここで改めて、地名を研究することの意義を述べておきたい。まず最初に挙げられるのは、その地名の発生した事情、背景を知ること、人々とその地形との関わり、地名についての感覚、命名の動機を探ることができるということである。また第二に、その地名の変遷を知ること、歴史的な変遷や広く各地との比較も考えることができる。さらに第三として、その地名の地の地形や自然、そこに繰り広げられる人々の歴史、生活の諸相などを把握することができるということが挙げられる。このように、地名の持つ様々な価値を小菅村において発見・保存していきたいというのが今回の調査研究のねらいである。

□ 地名の分類について

日本には、地名が一千万以上あると言われている。私たちが手紙を書く際も宛名

(地名)を書けば手紙は投函地点から宛先まで確実に届けられる。その意味で、地名は私たちの日常生活に極めて近い存在である。しかし、私たちは地名の意味やその由来について、深く考える機会はあまりないのではなからうか。

日本の地名の多くは太古の昔から受け継がれてきたものである。地名の多くは地形から発生したと言われている。ある場所を表すために、その土地の特徴を共通の符号に置き換えたのだ。例えば、大きな原野を「大原」とか、広い原野を「広野」とか、あるいは川のそばを「川辺」のように、その土地にある地形の特徴を観察し、誰しものが納得のいく地名が残されてきた。こうした地形に基づく地名を、「自然地名」と呼ぶ。

また、人間の様々な営みからは「文化地名」が発生した。これは狩猟や採取、生産活動や交易、交通などから生じたもので、例えば神社のそばの「宮前」、大きな村の「大村」などがそれである。

地名の分類法は、今挙げた自然地名と文化地名の二分法以外にも様々なものが考え出されている。ここで、先学による地名分類の例をいくつか挙げておく(敬称は略)。

【吉田東伍による分類：『大日本地名辞書』より】

- I 地形に取る (例：山、浜、林……)
- II 位置・形状・性質に取る (上、内、袋……)
- III 天然の存在物類に取る (鮭川、槇山、海苔浜……)
- IV 人造の存在物類に取る (門前、宮島、一宮……)
- V 氏族・部民・人物等の呼称に取る (物部、久米、海部……)
- VI 人事に因由す (浪速、安来、姫崎……)
- VII 擬準の名称 (富士、古志、熊野……)

【柳田国男による分類：『地名の研究』より】

- I 利用地名……通過、採取、捕獲、耕作など土地利用の目印、対象となったもの。
- II 占有地名……個人、家族などで山林その他を所有したときの地名。
- III 分割地名……上二つを基準として、それを区画(上・中・下や東西南北など)して呼ぶ地名。

【楠原祐介による分類：『埼玉県の地名—いくつかの地名の科学的考察』より】

- I 自然的地名用語……地形、土壌、日照、動植物など。

- II 人文的地名用語……法制、田制、土地区画、職業身分制、信仰など。
- III 施設起源地名……官衙、学校、公園、道路、墓地、社寺の存在によるもの。
- IV 分割地名用語……大小、上下、新古、東西南北など。
- V 伝説起源地名……伝説、伝承に基づいて命名されたもの。
- VI 瑞祥地名……初めから美称として使われたもの。
- VII 混合型地名……上記各種の混合型。
- VIII 二次的地名……他の地名および固有名詞を借用したもの。

【都丸九十一による分類：『地名研究入門』より】

- I 自然地名……(地形・地貌・動物・植物・鉱物・気象の各地名)
- II 歴史地名……(古代的・中世的・近世的の各地名と近・現代的地名)
- III 生活地名……(開発・耕作関係地名、生業・諸職関係地名、交通・運輸・通信・交易関係地名、村落生活関係地名、伝説・伝承地名、信仰生活関係地名)
- IV 修飾(指示)地名

ただし、今回の調査研究は地名学そのものを対象とはしていないため、簡便を図る目的で、以下に、自然地名と文化地名に分けて代表的な地名の成り立ちをみていくことにする。もっとも両地名とも全国的に膨大な数があるが、ここでは小菅村に存在する地名に関連するものを中心に上げていくこととする。

(5) 自然地名の成り立ち

自然地名は極めて多様である。川にちなんだ地名、野原にちなんだ地名、坂や山、谷や沢にちなんだ地名など、私たちの身近に存在する自然地名を見てみよう。

□ 川にちなんだ地名

小菅村には、「川入」「井戸沢」「水ノ久保」「日向サス」「山沢入」「川久保」「中河原」など、川や沢にちなんだ地名が多い。小菅村では川や沢沿いに集落が形成されてきたという歴史と深く関わっている。

古代人の集落は、必ずと言っていいほど川や沢の付近に存在した。これはもちろん水が生活上不可欠であったからであり、水を得るのに便利であったからである。さらに稲作が導入されると、稲を育てるために大量の水が必要となり、川から水を

引き田を開墾していった。このように人間と川とは古代から深い関係を保ってきた。それは地名にも現れていて、例えば大きい川のそばに住む集団の居住地が「大川」となり、小さい川のそばが「小川」となった。同様に、「川上」「川下」「川中」などの地名が生まれた。また川の流れが淀んで深くなったところを「淵」と呼び、反対に川が浅く流れの速いところを「瀬」と呼んだことから、「瀬」や「淵」の近くに「川瀬」「淵川」「瀬川」などの地名が多く生まれた。

また、川の出会うところが「あいかわ」と呼ばれ、「合川」「会川」「愛川」などの地名が生まれたり、川を渡るところに「川越」という地名が付けられた例もある。

□ 野原にちなんだ地名

昔の人は、野草を摘んだり小動物を狩ったりした場所を「野原」と呼んだ。人里離れた小高い場所を「野」と呼び、山裾の平らな広がりのある土地を「原」と呼んだ。野原を拓いて田をつくると、その土地が「野田」「田野」「原田」「田原」などと呼ばれた。のび広がる果てしない土地が「大野」、それが小さな場合は「小野」や「佐野」（佐は「ささやか」の意味を持つ）となった。さらに、なめらかに平たくすることを「ならす」と言い、その言葉から生まれた「奈良」はならされた開けた土地という意味を持つ地名なのである。

□ 谷や沢にちなんだ地名

山の間細長く窪んだところを「谷」と言ったり「沢」と言ったりする。沢の語源は、溪流のせせらぎの「さわさわ」という音から生まれたと言われている。谷の語源に関しては諸説あるが、荒れ果てた益のない土地という意味合いを持つことから、暗くて不幸な時代を「谷間の時代」という使われ方をすることもある。よって、小さな川沿いを奥地までのぼって獲物を獲ることを楽しむ人々は、そこを「沢」と呼び、一方、危険で役立たない土地と見る人は「谷」と呼んだようである。そのような背景を持ちつつ、「沢」や「谷」の字をもつ地名が作られたと考えられている。また、谷が山と山との間に深く入り込むあり様を「や（矢）」と言い表したので、「矢」の字がつく地名はこれに由来しているものもある。小菅川の源流部にある「矢下沢」は、山と山の深い谷を流れる沢なので、この影響を受けたと思われる。

□ 荒れ地にちなんだ地名

集落の外の危険な場所は、危険を知らせる地名が付けられる場合が多かった。崖

を表す「かき（柿、鍵、影、蔭などの字があてられる）」や地崩れしやすい地を示す「しし（鹿、穴）」、低湿地を表す「たい（田井、鯛）」などがそれである。例えば崖に囲まれた山が「柿山」、崖の底の沢が「柿沢」、崖の下が「柿本」などというように使われている。またこのことから、「鹿沢」という地名は、鹿が獲れる沢ではなく、地崩れしやすい沢のことを示しているのである。

その他、砂や小石のたまったところを「やす（安、野洲）」、沼地に近い湿地を「ふけ（福家、吹け）」や「うき（浮、宇喜）」、傾斜地を「なる（成、鳴）」、山間の狭い土地を「かい（峽）」「さこ（迫、佐古）」などと呼び、地名に取り入れた例がある。

□ 窪地と台地にちなんだ地名

丘に囲まれ窪んだ場所を「くぼ（窪、久保）」と呼んだ。低い場所は地下水が集まりやすく、浅めの井戸でも容易に水が得られたため重宝だったのだろう。「くぼ」のつく地名はそのような場所を指した。また昔の人は、平地の中の小さな台地を「島」といい、山地が張り出した先端で、平地の中の台地となった辺りを「崎」と呼んだ。よって「島」や「崎」の字のつく地名は、そこが台地になっていることを指している。逆に船底のような小さな窪地という意味から「船窪」「船沢」「船ヶ台」「船坂」といった「船」の字のつく地名が生まれた。

□ 峠にちなんだ地名

山越えの道で最も高いところが峠にあたる。そして古代には峠のことを「坂」と表した。坂は坂道という意味ではなく、道が反り返っている様子を表す。その坂の下に町がひらかれると「さかもと（坂下、坂元、坂本）」などの地名で呼ばれた。

□ わき水にちなんだ地名

昔の集落は、川のそば以外では自然のわき水の近くに発達したものが多い。これは、「大泉」「今泉」「小泉」「平泉」「泉沢」「泉谷」「泉川」「泉田」「泉平」「泉山」「泉井」などの地名に残されている。また、平地での泉の水がきれいな有り様を反映した「清水」、平地ではなく傾斜地に湧く泉の場合を「平清水（ひらしみず）」と同じ泉のわく地名でも使い分けられている。さらに、「強清水」は湧水量の多い泉を「つよい清水」と表現したことにちなむものであり、東京の「お茶の水」の地名もわき水にちなむもので、近くの高林寺でお茶を入れるのに適した水が湧いたことからついたものである。

なお、大昔、水は「み」と呼ばれていたことから、温かい水は「あたま（熱海）」、

それより熱い水は「あつみ（温海）」と命名されて呼び分けられている地名もある。また温泉が川のようにわき出る有り様から「熱川（あたがわ）」の地名も生まれた。

□ 海岸にちなんだ地名

大きくて広い砂浜のあるところには、「大浜」「小浜」「横浜」「長浜」「上浜」「下浜」などの地名がつけられている。「浜」の語は「端し海（はしまま）」が詰まってできたといわれている。また宮城県釜石市は「両側に山がせまった（昔の）かまどのような地形をした磯浜」という由来を持ち、三重県伊勢市の「伊勢」は「磯」が転じたもの、また浜名湖はもとは浜のそばの湖という意味で「浜の湖」と呼ばれていたが、明応七年（1498）の津波で海とつながって、今の浜名湖ができ、海水湖となった今も「浜の湖」が変化した「浜名湖」という地名で呼ばれているという歴史を持っている。

また、昔は先端を「さき」と言ったことから、海に突きだした陸地の外れを「崎」という。それに「み」の美称をつけて「岬」と呼ぶ用法が生まれた。長崎、大崎、川崎などは、こうした岬の近くに栄えた集落についた地名である。岬よりさらに細く突きだしたところが「鼻」と呼ばれ地名に残る場合もあり、これは人間の顔の中で鼻が突きだしている有り様に由来している。

(6) 文化地名の成り立ち

人間の生活や営みの中からたくさんの地名が生まれてきている。ここでは、農耕や開墾、集落の形成と発展、神社や寺院、信仰など自然地名以外のものを大きく文化地名として位置づけ、それぞれの内容を簡潔に紹介する。

□ 田にちなんだ地名

「田」のつく地名は非常に多くみられる。例えば円形に田が開けたところを「丸田」という。それを「輪田（わだ）」ともいい、「和田」や「曲田（わだ）」の字に転じた例もある。もっとも、聖徳太子の十七条の憲法にある「和をもって貴しとなせ」の教えより、「和」の字が縁起の良いものとされたことから、「和田」の地名表記が好まれたようである。また四角形の田や畑の近くには「ますだ（枡田、増田、益田、升田）」の地名が生まれ、「ますます増える」に通じることから表記は「益田」「増田」が好まれた。

さらに山を拓いて田を作ったところに「山田」が、ヨシが茂る原野を拓いて農地

にしたところに「吉田」の地名がそれぞれ生まれた（これも「ヨシ」に縁起の良い「吉」の字が当てられている）。他には田が広く広がるところが「おおた（大田、太田）」、ある地域につくられた田の中の高い部分が「高田」、田地が栄えるように願ってつけられた「福田」などの地名が田に関する地名として挙げられる。

□ 村の発展を表す地名

古代の農民は水の引きやすい所を選んで田を作った。集落は田より一段高い丘の上や山裾に作られ、集落が発展するにつれて集落からますます離れた場所に土地を求め田畑を開墾していくこととなった。そのため新たな開墾地は、農繁期に仮の小屋をつくって泊まったことから、田にいるという意味で「田居（たい）」という地名が生まれ、反対に集落にいるという意味から集落の方を「村居（むらい）」と表した。そして「村居」から「村井」が、また「田居」から「田井」「田伊」「鯛」の地名が派生した。さらに、田居と呼ばれていた耕作地が、次第に開発されて広がっていくと、そこに住みつく人が多くなり新たな集落ができる。こうなると一時的に田地のそばに住む「田居」では都合が悪い。そこで、「田居」が「田の中に住むこと」を表す「田中」に変化したと考えられている。

田中の概念は「いなか」という語を生んだ。「田の中の舎（いえ）に住むこと」が田舎（いなか）という言葉の語源であり、「たなかに居る」ことを「いなか」と呼ぶようになった。

□ 開墾に関する地名

小菅村の白沢川の支流に大白沢が流れているが、そこに寺畑、堀開などの小名があるが、ここは地元の住民によって開墾された場所であり、開墾にちなむ地名が今も残されている。

古代に新しく開発された土地は「はり（治、張）」や「ほり（掘、堀、洞）」の語を使った地名が多い。新たな開墾地を示す地名「新治（にいはり）」はその例である。兵庫県の播磨（はりま）という地名もこれに由来している。また「新堀（にいほり）」は、新たにつくった堀によって拓かれた土地という意味を持つ。東京の日暮里（にっぽり）という地名の語源はここにあるという。なお「新田」の字を「しんでん」ではなく「にった」と読む地名は古い時代に開発された土地である。そのほか、崖を表す「つく」という語に端を表す「は」の語がついて、「つくば」という地名が生まれた。これは筑波山の西の斜面が急斜面であったことによる命名といわれている。

□ 神社や寺院に関する地名

文化地名の中でもっとも数が多いのが「宮」のつく地名である。昔の人は、神社や寺院は土地をまもるものだと考えた。そのため、神社や寺院のそばには、そこに土地をまもってくれるものがあることを示す地名を付けた。「宮坂」「宮山」「宮岡」「宮口」「宮本」「宮前」「宮下」「宮道」「宮田」「宮中」「宮崎」「寺前」「寺井」「寺内」「寺地」「寺尾」などがその例である。また、神社の通称をそのまま地名にした「大宮」「小宮」「広宮」「森宮」「桂宮」などの例もある。そのほかに、「神田」「神戸（かんべ、こうべ）」はかつて神社の、「寺田」はかつて寺院の領地であったことにちなんだ地名であり、「亀田」は神田から転じたものと言われている（亀の形によるものもある）。

□ 八幡信仰に関する地名

現在日本に最も多くみられる神社は稲荷神社、八幡宮、天満宮である。この中で八幡宮は、もともとは北九州の宇佐（大分県宇佐市）にいた航海民がまつた海神であったというが、八幡宮の祭神は次の三本柱であるとされる：

- ・八幡大菩薩の名前を持つ応神天皇
- ・大帯姫命とよばれる神功（じんぐう）皇后
- ・比売神（ひめがみ）と呼ばれる多紀理比売神

八幡信仰は早い時期に仏教と習合し、天応元（781）年に八幡神が「菩薩」号をもらい八幡大菩薩となった。のちに源氏の守り神で武芸の神と考えられるようになり、源頼朝が鎌倉幕府を開いたときに鶴岡八幡宮の大がかりな社殿を築いたことは有名である。またこのことをきっかけに全国の武家が八幡宮をまつようになり、それに関連して「八幡（やはた、やわた、はちまん）」の地名が今でも各地に残っている。

□ 天神信仰に関する地名

上に述べた神社のうち天満宮は、「天神さま」との呼び名でも親しまれており、菅原道真をまつるものである。道真は平安を代表する詩人で、複数の天皇に引き立てられ出世したが、ある時左大臣の藤原時平が彼の昇進に反発し、無実の罪で道真を九州に左遷したため、道真は寂しい最期を遂げた。ところがそのあと、道真の左遷に加担したものが次々に謎の死を遂げ、天災も相次ぎ、御所に落雷まであった。人々はこれを、道真が死後雷神になって恨みを晴らしたものと信じ、朝廷は民衆の

道真を慕う声におされる形で道真を天神、すなわち天候を司る神としてまつるようになった。こうして全国的に道真（天神）をまつる神社「天満宮」がつくられ、これがそのまま地名にも使われる例がみられる。

□ 熊野信仰に関する地名

熊野神社の地名をたどると和歌山県南部の広大な山地に行きつく。かつては紀伊半島南部に広がる未開墾地がすべて「くまの」と呼ばれた。「くま」とは「隈」とも書き、「土地のはずれ」とか「奥深い地」を表す。そのような山奥に住む動物がクマであり、奥深いところにある原野が「熊野」と呼ばれた。そのような紀伊半島南部の山地で生活する人々がまつた自然神が熊野の神であり、この神は、古くは目に見えず山林を素早く移動する神だと考えられた。また強い力をもつとされたため、平安時代末に政治が乱れた際、白川法皇や鳥羽法皇は熊野の神の呪力を借りて国内を安定させようとし、「熊野御幸」と呼ばれる熊野詣がさかんになった。また熊野が山岳信仰と結びつき、山伏の霊場となると、中世以降山伏が地方をまわり熊野信仰を広めたため、全国に四千余社の熊野神社がつくられ、「熊野」の地名が各地に生じることとなった。

□ 稲荷信仰に関する地名

稲荷社は特有の朱塗りの鳥居をもち、正式に確認されているものだけでも全国に三万二千社あり、私的なものまで入れるとその十倍になるとも言われている。もともとは古代の渡来系の豪族である秦氏により広められ、白鳥が稲の精霊となったという東アジアに広く分布する発想のもと、農耕神をまつたものと考えられている。秦氏は古代以来各地に進出し田畑を開発していったが、それに伴って稲荷信仰と稲荷社が広まっていったと考えられている。そのため全国各地に「稲荷」が地名になった例が点在している。

□ 諏訪信仰に関する地名

長野県以外にも（小菅村にも）「諏訪」や「諏訪山」の地名があるが、これは諏訪神社、すなわち諏訪信仰にちなむものである。諏訪信仰は朝廷に重んじられたわけでも、有力な武家に保護され広められたというわけでもないため、今のところは山の民が諏訪信仰を広めたのではないかという説が考えられている。すなわち中世には朝廷や幕府の支配を受けずに山地で暮らす人々がいて、彼らは山で鍛えられた体を持ち、農村の人々からは強い呪力をもつのではないかと恐れられたというので

ある。彼ら山の民は縄文時代からの自然神を信仰していて、山の民のうち現長野県の諏訪に定住した人々が、彼らがまつる神を諏訪の神と名付け、また諏訪を通して行き来した他の山の民が諏訪信仰を受け入れたため諏訪以外にも広まった、という説である。

□ 四天王信仰、不動信仰に関する地名

日本では、本来の仏教信仰では傍流にあたる四天王信仰や不動信仰がさかんだった時代がある。これは仏教の守護神である四天王や五大明王の中の不動明王が、強い仏として武士達に慕われたことによる。地名としては、大阪の四天王寺の近くに「天王寺」がある。また成田不動尊の「成田」に関しては、「成」は「なりわい」の「業（なり）」に由来し、農業、生業を表している。農業が栄えている田地が「成田」であった。

□ 観音信仰、菩薩信仰に関する地名

神名をもとに小地名が作られた例は多いが、仏の名前が小地名になる例は比較的少ない。それでも、さほど有力な仏ではないけれども庶民に愛された観世音や地蔵にまつわる地名は比較的多い方である。なお日本には浄土真宗や浄土宗の信者が多く、阿弥陀如来を拜んで極楽浄土を願ったが、観世音菩薩（略称「観音」）はその阿弥陀如来の脇侍である。また地蔵とは一切衆生の苦を除き福利を与えることを願う地蔵菩薩の略である。平安時代末から地蔵信仰はさかんになり、中世には庶民が石仏を身近な仏としてまつるようになった。このような地蔵信仰は山の神、川の神、道祖神のまつりと融合したため、古くから土地の守り神がまつられるところに地蔵菩薩の石像が置かれた場合が多い。これら地蔵の石仏は旅人の目印ともなり、「地蔵峠」「地蔵岳」「地蔵山」「地蔵原」などの地名が生まれた。

□ 聖徳太子信仰に関する地名

日本にはあちこちに「太子堂」や「太子」の地名がある。その多くは聖徳太子をまつる太子堂があったことをもとに生まれたものである。聖徳太子は、その死の直後から仏教を日本に広めた偉人として慕われていた。しかし太子信仰が全国に広まったのは鎌倉時代以降のことで、浄土宗や浄土真宗の普及とともに広がっていった。阿弥陀仏をまつり極楽浄土を願う浄土宗や浄土真宗はまず農民に受け入れられたが、農民達は、自分たちが差別してきた非農業民（東日本では「山の民」「川の民」などと呼ばれる）が同じ阿弥陀仏をまつることを認めなかった。山で炭を焼いて農村

に売ったり、小さな川船で荷物運びをしたりして、農村に依存しつつ農業以外で生活する非農業民は、そのため、阿弥陀仏の代わりに聖徳太子をまつようになったと言われている。

<主な参考文献>

『地名研究入門』（都丸十九一著 三一書房）

『地名の由来を知る事典』（武光誠著 東京堂出版）

『地名の歴史学』（服部英雄著 角川叢書）

『日本の地名』（谷川健一著 岩波新書）

『日本の地名がわかる事典』（浅井建爾著 日本実業出版社）

(7) 小菅村の地名と由来の調査

□ 小菅村における調査の経過

2000年3月から、「多摩川源流絵図」小菅版を作成するため、調査活動を開始した。この活動は、中村文明所長を中心に、佐藤英敏小菅村総務課主幹・源流研究所事務局長、小菅村教育委員会の降矢教育長、加藤源久教育課長ら小菅村役場の協力・援助のもと、村の高齢者学級の全面的な協力を得て進められた。また、源流域の実踏調査には、多摩川源流観察会、地元獺友会の会員、小菅村役場の職員の積極的な協力が図られた。

現在、小菅川の下流から遡りながら淵と滝の名称の確認をした。ツリガネ淵、テングウ淵、ブッコロサレ、古橋場淵、カマツ淵、ベーゼェ、ウバノフトコロ、桜淵、ウバシ淵、浅間淵、コンコツ淵、ショウジ淵、マキムシバの淵、梅オジィー下淵、キネッコ淵、蛇石淵、白沢出合い淵、雨乞いの滝、ヤチグラノ滝、ドウドコロの淵、曲淵、お安淵、矢花淵、三太郎淵、センゴリ淵、清水淵、瀬干し、山の神淵、木下淵、ナガトロ淵、カマツ淵、弁天岩、丸淵、エゴ淵、白糸の滝、赤沢出合い下淵、たわむれ淵、釜淵、のぞき淵、瞳淵、雄滝、妙見五段の滝などの淵や滝の調査をおこなった。また、沢や尾根の名称とその由来に関する聞き取り、及び小字や小名の聞き取り調査を平行して実施した。

小菅川の実踏調査を開始したのは、2000年3月12日からである。その日はたまたま雪の日であった。雪の風景は一年の内で撮影できる機会が限られているので、妻の真里と二人で出かけることにした。我が家から柳沢峠を越え、塩山の一ノ瀬高橋地区を通り丹波山村に入り、丹波山村を南におれて今川峠を登り、小菅村に着く。

小菅村を東に進み林道を5キロ、30分ほど上り詰めると林道の終点に着く。雪の日の路面は怖くて徐行運転の連続であるため、2時間を超える時間を要した。雪の量はさほどではなかったが、裸木の枝に降り積もった雪は、静寂の溪谷の中に目映い程の美しさを秘めていた。真っ白な銀世界に佇み、吹き寄せる微風に顔を晒しながら、「多摩川源流絵図」小菅版が無事に出来上がりますようにと両手を合わせ山の神に祈った。この日から、小菅川の淵や滝、沢や尾根の名称とその由来を辿る旅が始まった。

その後、小菅川の源頭まで幾度も踏査し、酒井巖さんなど地元の高齢の方に一緒に現場を確認していただいたこともしばしばあった。また、小菅村の8地区に関しては、白沢の奥秋信俊さん、奥秋忠俊さん、橋立の木下三吉さん、木下清さん、小永田の船木常男さん、田元の亀井常成さん、東部の加藤亀吉さん、加藤信休さん、横瀬健さん、川池の小泉春好さん、中組の船木四郎さん、田中利数さん、長作の守重洋作さんなど多くの方々から小字の由来など貴重な話を伺った。

□ 小菅川の滝、淵等の名称と由来

ここでは、小菅川を下流から遡ることとする。昭和32年に完成した小河内ダムの完成により、奥多摩や丹波山村で多くの民家が水没し、周辺の貴重な滝や淵も姿を消したが、ここには、小菅村に関して特に印象に残った淵を二つ紹介した。また、大洪水により甚大な被害を出した経験から兩岸を固い堤防で固められたところもあり、聞き取った淵が昔の面影を失っているところもあるが、人々の記憶に残っている淵に関しては、出来る限り記録に留めて置いた。

- ツリガネ淵 東京都奥多摩町との県境の山腹に大寺、小寺、尼寺の三寺が建立されていた。ある時、突然小寺の釣鐘が落下して紛失してしまった。村人が方々を探したが見つからなかった。小菅と奥多摩の境に地蔵があり、その地蔵のすぐ近くにある大きな淵でこの釣鐘が見つかったことからツリガネ淵と呼ばれた。今は、小河内ダムの建設に伴い水没したため淵を見ることは出来ない。
- テンゴウ淵 兩岸が鋭く迫った地形の岩と岩の間に、大きな渦を巻く不気味な淵があった。淵頭は、V字に刻まれた岩から轟々と水流が流れ下り対岸の岩に当たって渦を巻き、紫色の見るからに深い淵で泳ぐ勇気を削いでしまう淵であった。青年が投網を投げたが網が渦に

巻かれ広がることはなかったという。ここを通過するには、岩を恐る恐るへつりながら通過したという。

- 十二天 大成、金風呂地区には、昔から文化的な生活を送る人々が多く住んでいた。病気になるとお参りに出かけ、願を掛けて病気が治ると神に感謝した。目の神、耳の神、鼻の神など身体のいろいろな神が祀られ、個人の神もいれば、地区共通の神もいたという。この十二天には、十二仏を供養する堂宇があったが、今は大成に移転した。
- ブッコロサレ 道路を開くとき工事中の人夫が、崩落した土砂に埋まって殺された場所。ブツブツ岩とも呼ばれた。
- 古橋場ノ淵 昔、橋を架けて渡っていた場所のすぐ近くにあった淵。新玉川橋の下流に当たる。
- 釜ッ淵 昔、玉川の上流から切り出したケヤキの一本橋が玉川橋の所にかかっていた。その橋は地元では「高橋」と呼ばれていたが、この橋の近くの岩に丸く掘れた釜の形をした穴があいていた。その場所のすぐしたに淵があった。ここでは、昔、干ばつの時、関を作り水をためてセンゴリをしたと言い伝えられている。
- 玉川 三頭山から流れ下る小菅川の支流の一つ。江戸時代に関戸村（現多摩市）の名主をつとめた相沢伴主（ともぬし）は、弘化2年（1845年）多摩川の源頭部から河口までの長い巻物の絵図を作成したが、その中で多摩川の源流は三頭山北西斜面に源を発するとしるしている。玉川の名前の由来は分からないが、玉は美しいという意味が込められていて宝石のようにキラキラと輝く川に対して付けられたのかも知れない。
- アシ沢 玉川の支流の一つ。地元の言い伝えによると戦いに敗れた玉姫の一行がここを通りかかり、玉姫がこの沢で足を洗ったことからこの沢をアシ沢と呼ぶようになったという。

- 熊切沢 玉川の支流の一つ。オマキ平を彷徨っていた熊がこの谷に下り切られて傷ついたことからこの沢は熊切沢と呼ばれている。いつ頃の話かは定かではないが、この周辺は今も熊がよく出没する。
- ナツチ沢 玉川上流部に位置し、谷が大きく開き、よく日差しが届くことから、夏地と呼ばれ、暖かい土地の中を流れる沢。
- 池の平 三頭山とその麓との中間点に位置する所に平地が広がる。そこは以前満々と水をたたえた大きな池があった。この池に、昔、戦いに敗れた玉姫の一族が通りかかり、この池で水を飲んでいるところを取り囲まれ、玉姫はこの池に身を投げたという。玉姫は大蛇に変身して敵をかみ殺し、この池で恋仲の青年と仲良く暮らしたという伝説の池でもある。
- 桜 淵 淵のすぐ上に見事なピンクの花を咲かせる桜があった。この桜は村人に農作業の開始を告げるめあすにもされていた。花が開くと馬鈴薯の植え付けを始めたという。この桜は今はない。
- ウバガフトコロ 姥の懐のように日当たりがよく暖かい場所。丹波山にも同じ地名がある。正確には分からない。
- 浅間淵 この淵の上の横瀬公一さんの近くに富士講の碑が建っている。富士浅間神社にちなんで付けられた淵の名前である。
- 精進淵 余沢橋の下流にあった淵。今は護岸工事でなくなったが、富士講に出かける信者がここで身を清めたことからショウジ淵と呼ばれた。
- マキムシバの淵 淵に流れ込んだ流れが大きく巻いていたことからこの名が付いた。
- 梅おじ一下淵 近くの子供が夏になると泳ぐいい淵。深くて底は砂が貯まっていた水遊びに最適の場所だった。
- キネッコ淵 明治の終わりの大洪水の時、ケヤキの大木の根がこの淵に流れ着

いたことから、キネッコ淵と呼ばれた。ニガッパヤなどの小魚がウヨウヨ泳ぎ回っていた。

- 蛇石 淵が3つ連続する景勝地ながら、恐い名前が付いている。右岸は絶壁で左岸には大きな岩がごろごろしている。左岸の岩が蛇に似ているという話もある。
- 白沢出会い淵 小菅川と白沢が合流するところに深い淵がある。大きなヤマメが棲んでいて良く釣り人が訪れる。
- 白沢滝 白沢を登り始めると二段の滝に出会う。滝壺付近は、ねじれた形状が続くので、正面から滝の全体を眺めることは難しい。切り込んだ地形に木が覆い被さっているので、夏場は昼でも薄暗いが、白沢で一番美しい姿をしているので、川の名前をいただいてこの名前で呼ばれている。
- 笹畑川 オマキ平の南を東に延びた沢。源頭部は鶴峠から三頭山に延びる稜線に当たる。そこには、ブナやイヌブナ、ミズナラやクリ等の水源林が広がっている。笹畑川の奥には、ハイマゼコウチ、シマイ畑、ツタキリ、井戸の沢、オオザス、イタチオドリ、オバノサワなどの小名がある。
- ヒナタザス 南向きの日当たりのいい土地を流れる沢のこと。ここには、昔、キリカエ畑があり、ムギのあとに里芋やジャガイモを作った。また、焼畑が戦後まで続けられていた。焼畑は、夏に細かい木を燃えやすいように寝かし、一週間ぐらいして家族みんなで燃しに出かけ、燃し終わったら、ノドトリをした。ノドトリとは、焼いたあとに残る小枝を処理することを言う。
- 釜土沢 この沢沿いに青い粘土がとれ、炭焼き釜を作るのに役立てられたことから、この沢を釜土沢と呼ぶ。炭焼き釜の煙だしの煙突をクドといい、このクドを支える部分に最も高温の火が回る。このクド張りが炭焼き釜の仕上げで一番気をもむ場所に当たる。釜土沢

の粘土は、高温に強くクド張りに使われた。また、蔵の壁やいろりにも利用された。

- ナカノサス 浄進場（しょうじんば）と奈良倉との間にあることから、ナカノサスと呼ばれた。浄進場とは、富士講の碑がある所でここから大月に出て富士山に向かった。浄進場を通る道が富士への一番の近道だった。
- 奈良倉沢 奈良倉山（1349祀）を源頭に抱く沢であることからこの名前が付いた。この沢には、都水源林と民有地の堺付近に奈良倉の滝がある。倉とは、岩や大きな石が獣たちのすみかになっている場所を指す場合と三角点のある大きな山を指す場合がある。ここには、三角点がある。
- 大白沢 白沢の支流の中で一番長いことからこの名が付いた。源頭は松姫峠にあたり、一帯には都水源林が広がっている。地元では、「おおじらさわ」と呼ばれている。小名に長久保、ホリアケ、寺バタケがあり、ホリアケは、鍬で掘りながら開墾したことから生まれ、寺バタケは土地の良い場所をそう呼んだと言われている。また、落差はないが一番滝、二番滝、三番滝と呼ばれる滝もあった。魚に関しては、大白沢と奈良倉沢にはかたのいいヤマメがいた。
- 大川 小永田を流れる唯一の沢が大川。住民の生活の基盤は水と畑だったので、水の大切さへの気持ちを込めて、小さな流れだが大川とって大切にした。
- 井戸入沢 沢の奥地は扇状に広がっている。白沢の5～6軒がこの水をつかってダイコンやイモを洗ったり洗濯に利用したりした。
- ヤチグラの滝 小菅川が棚沢と出会う地点にある滝で、ヤチは「谷地」つまり鋭く刻まれた谷とか、谷沿いの湿地を意味したものと考えられる。ヤチグラの滝の形状は、大変珍しい特徴を帯びている。雷の稲妻が落ちるような姿で滝の前面の岩がえぐり取られていて、この滝

の誕生がしっかりと大地に記憶されている。こうした形状の滝は見たことがなく学術的にも注目される。滝壺は、下水処理センターの施設建設の折り埋められた経過があるが、この滝の存在自体の意義は大きい。

- **ドウドコロ淵** 平山キャンプ場のすぐしたにある淵。ドウドコロは地名からきている。大きな岩を配し深い淀みを持ったこの淵は、子供たちの絶好の遊び場所である。
- **まがり淵** 淀橋と平山キャンプ場との間にある。川の流れが左にカーブした地点に生まれた淵からそう呼ばれている。ここにあった大きな岩から子供たちはこの淵に飛び込んで遊んだ。
- **お安淵** 大正時代にお安さんと呼ばれる方がこの深い淵にはまって命を落とした。地元では、「お安まわし」とよんでいた。昔は子ども達の水遊びの格好の場所だった。
- **矢花淵** 平将門伝説から生まれた淵。将門が敵に追われて矢を放たれ、その矢がこの淵の岩に無数に刺さって矢の花が咲いたとの言い伝えによる。将門は、ここから宮川を北に上ったところで一戦を交えたといわれ、「一戦場」「血の久保」「逃げ延ぶ」（シゲノブ）という呼び名も残っている。
- **三太郎淵** 酒井養魚場のすぐしたにある淵で、右岸に大きな岩が迫り出し小さな流し込みを持つ淵である。最近洪水で砂に埋まり浅くなっている。。
- **センゴリ淵** 富士講の信者の身を清める場所としても利用された淵で、「テングウ淵」ともよばれていた。
- **清水淵** 沢の出合いにある綺麗な澄んだ淵。この淵のすぐ上に瀬干しをした中州がある。瀬干しとは中州の左右を流れる沢のどちらかを堰き止めて魚を捕る方法のことである。

- 一番堰堤 矢瀬尾堰堤と呼ばれている。「昭和3年11月内務省東京事務所、海拔709[㍍]、堰堤の高さ10[㍍]。」と刻印が打たれている。砂防ダムの目的で作られた。
- 山の神淵 山の神が祀られているすぐ下の淵。淵の南側斜面の山で木を切り出すと事故が多発して「たたり山」として恐れられていた。そこで山の神をまつり、仕事の安全を祈ったという。
- 棚倉出合い淵 棚倉沢との出合いにある淵。細くて長い淵は、洪水で浅くなったり深くなったりを繰り返す。ヤマメの住処になっていて覗くと泳ぐ姿がよく見える。
- ナガトロ淵 流れが緩くて深い淵。ここからナガトロ淵、釜ッ淵、丸淵の3つの淵が連続していた。水無沢堰堤が出来た関係で全体として浅くなっている。
- 釜ッ淵 釜のように丸くえぐられた淵。左岸にベンテン岩と呼ばれる大きな岩がある。のぞき込むと吸い込まれそうな深い淵だった。
- 丸 淵 丸い形の深いふち。谷底の大きな茂みに覆われていた。
- 栃平堰堤 五番目の堰堤で昭和5年7月30日に完成した。内務省東京土木事務所が作り、海拔808[㍍]、高さ12[㍍]とするされている。
- 赤沢出合い下淵 赤沢との出合いからやや下ったところにある。早瀬の下に出来た淵で右岸の岩を削るようにして出来た淵である。このすぐしたに左岸から大きく迫り出した岩盤がある。正面が深くえぐられており、洪水時の水の威力のすさまじさを教えてくれる。
- たわむれ淵 両岸は切り立った岩場になっていて昼でも薄暗い。鹿やテンなどの動物が身を隠し水と戯れる格好の地点であり、よく小動物を見かける。

- 釜 淵 釜のように丸く深くえぐられた淵。この淵から三本に分かれて流れる小さな滝がある。青々と澄んだ淵は美しい。このすぐ上流が小ぶりのV字谷になっていて子ども達を対象にした源流体験の場所に当てられている。
- のぞき淵 矢下沢出合いから少し下ったところに、長方形をした綺麗な深い淵がある。いかにも天然の山女がいそうな淵でそっと覗きたくなる淵。現在、赤沢出合い下淵からたわむれ淵、釜淵、のぞき淵を利用した「源流体験教室」が実施されている。
- 瞳 淵 矢下沢の合流地点から少し上流に進むと、丸くて深い淵に出会う。淵頭に落ち込む流れは、真っ白な泡を巻き込みながら淵の中に吸い込まれていく。澄みきった流れはキラキラと輝き汚れを知らない子供の瞳に似ていることからこの名前が付いた。
- 白糸の滝 36㍍の落差を持つこの滝は、小菅の滝の中で最も美しい滝である。高い絶壁から白糸となって一気に流れ落ちる姿は、訪れる者を惹きつけて止まない。この滝の上流部に今倉沢があることから、今倉の滝とも呼ばれている。
- 雄 滝 小菅を代表する滝の一つで、二本に分かれて流れ落ちる滝の中心に、そそり立つ岩があり、それが男性のシンボルに似ていることからその名が生まれた。大滝、魚止めの滝などとも呼ばれて親しまれてきた。
- 鳥小屋出合い滝 小菅川と鳥小屋沢との出合いにある滝で滝の正面にシオジの巨木がある。このシオジは幹周りが6㍍近くある巨木で、小菅で最も大きなシオジである。
- 鳥小屋淵 鳥小屋淵沢の正面にある淵である。鳥小屋沢は、鳥小屋出合い滝から東に流れて小菅川としばらく併走し、少し下流で本流と合流する。この滝の目の前にある小さな滝の滝壺になっているのがこの淵である。

- 無名滝 鳥小屋淵から少し上流に進むと、落差は少ないが布滝となって流れ落ちる滝がある。滝壺は青々として深く澄みきっている。滝の右岸に巨石を配しているなかなか見応えのある滝である。
- 妙見五段の滝 フルコンバ沢の出合いのすぐしたに、五段になって流れ流れ落ちる見事な滝がある。両岸は険しい岩がそそり立ち、人間の進入を阻んでいる。小菅川で最も存在感があり風格のある滝である。小菅川を代表する滝との意味合いから、小菅川の源頭である妙見の頭の名を取り、妙見五段の滝と呼ばれている。

□ 小菅村の小字の名称とその由来

《東 部》(余沢・大成・金風呂) — 12

- 日向金風呂 「ヒナタカナプロ」と呼ばれている。戦いに敗れたため、大成の大寺にあった金風呂が敵の手に渡ることをおそれた村民は、木の枝でヅマ(そり)を作って引きおろし金風呂を川原の近くに埋めたという言い伝えがある。その金風呂の埋められた土地を金風呂と呼ぶようになったという。また、近くのシオノサスから鉱泉が湧き出し、お風呂に利用したことから金風呂といわれたとも。日向とは日当たりが良くて暖かいと言う意味。
- 大 成 成はナリ、ナルイにしうじるもので、緩やかな傾斜地を意味した。江戸の昔から鴨沢や川野村からの旅人は、大成、余沢を通過して甲州に向かったが、その傾斜地に集落が形成され、大成と呼ばれたのであろう。また、雲取から余沢を抜ける富士講のルートにあたり、人の往来は頻繁で、石仏なども多く見られた。大成は街道筋で大寺、小寺、比丘尼寺の3つの寺が並び建つなど村の入り口であったとともにさまざまな人々のまじり合う場所であったと思われる。偉いお坊様がお成りになったこともあったという。「お成り」が大成に転じたとも考えられる。また、昔から「大成請け」といって工事を気前よくやったため儲からずにむしろ損をしたやり方をこうよんだというエピソードも残っている。

- 梅ノ木久保 梅ノ木が植えられていた窪んだ耕作地のことで、この梅ノ木沢には、水車が二台回っていて麦やそばをついていた。
- 姥ガ懐 姥の懐のように、南向きで良く日が当たり、ポカポカと暖かい場所をウバガフトコロという。作物もよく育ち麦やコンニャクが栽培されていた。
- 大茶ア 開墾地で地形が良かったのでお茶畑が多かったことからこの名前が生まれた。ここには、養蚕の桑畑も広がっていた。ここには、棚口と呼ばれる滝が流れていて、余沢の水源として利用された。
- 大夏地 小菅は谷が深く、日当たりが悪かったり、日が早く陰ったりする場所が多いため、日当たりがいい場所は重宝されている。この場所は日当たりが良い広い土地である。御岳神社の下から東にかけての耕地でこの地区で最もよい耕地といわれている。夏地は白沢、長作、橋立など各地区にあるが、大がつくのはここだけである。
- 下夕畑 地元では「シタハタ」と呼ばれているが、大茶アや大夏地の下のほうにある畑がここにあたる。
- タンノカヤ 茅場は山の上まで登り茅を長いまま切って束ねて背負って降りて炭俵を作った。ゴイチさんとこの大きな茅場は有名だった。しかし、タンノカヤあたりでは茅は刈れなかったのでこの名の由来は知れず。
- 高橋平 高橋とは台地の端を意味している。ここは小菅川の右岸に位置し山裾が大きく迫り出した十二天のある平らなところ。昔はこの場所に行く橋がすぐ近くにはなく玉川の古橋場を通して渡った。古橋は池ノ平の奥地のオッセヤマからシオジを2本切り出し橋を架けたという。
- 玉川 三頭山から流れ下る玉川の流域全体の土地。玉川のはっきりした

由来は不明であるが、江戸時代に多摩川の源頭として「調布玉川絵図」に描かれるなどその存在が注目された。玉には、美しいもの・大切なものの喩えの意味が込められているので、この川はキラキラ輝く美しさを秘めていたのであろう。この周辺には戦いに敗れた玉姫がお付きの者と一緒に逃げ延びたという諸々の伝説がある。

• セ ト
川の流れの早いところを瀬ということから、その瀬の入り口に当たることからこの呼び名が生まれたのであろう。日陰の多い日当たりに恵まれない畑で、サツマイモ、ジャガイモ、ソバなどが栽培された。また、もともとセト（瀬戸）は狭い海峡を意味しているが、ここは川原が徐々に狭まり細くなっていることからその様子をセトと呼んだのかもしれない。現在、森林公園キャンプ場として利用されている。

• 余 沢
ここは、交通の要衝で口留番所（関所）が置かれた。甲州裏街道の一つにあたり、雲取、鴨沢から大成、余沢を抜けて白沢、七保へといたる富士講の道として、あるいは大菩薩から甲州塩山に抜ける街道として利用された。

《白沢地区》 — 9

• 井戸入
白沢地区の水源にあたり、この沢の水を飲料水として利用している。地元では「イデーリ」と呼ばれているが、この沢は昔「井戸川」と呼ばれ親しまれており、きれいで美味しい水が流れていた。

• 作ノ宮
作ノ宮神社は、白沢の氏神様であるが、その神社が作られたことから作ノ宮と呼ばれている。このお宮には、大黒様（オオクニヌシノミコト）が祀られている。

• 白沢夏地
白沢地区の中で日当たりがよく暖かく、作物の収穫の多い一等地の畑として利用されている土地。この畑では、まず麦を収穫し、麦をとった後にコンニャクが栽培されていた。その合間にサツマイモ、トウモロコシ、キビ、アワなどが植えられた。

- 白 沢 この白沢の上流部には、三頭山や奈良倉山があるなど深い森林に覆われている。水が透明感溢れる様を白い水の流れる沢「白沢」と呼んだのであろう。ここは、昔、富士信仰のルートに当たり、大成、余沢から白沢を通り、大月方面に向かった。
- ムッカ 白沢地区から見て北東方向にある沢を向川と呼んでいた。この向川が「ムッカー」と訛ったもので、普段は水量は少ない。
- 降矢戸 地元では、「フリヤード」と呼ばれている。畑としては日当たりが差ほど良くなく春地として芋などが植えられていた。堰堤が出来る前は、谷は深くえぐられており、一本橋がかかっていたが、今は谷が埋まって開けている。ここが富士講の通り道であったことから誰でも利用できる「古宿」があり、フルヤドが「フリヤード」と訛り、降矢戸と漢字が当てられたのであろう。
- エボシ 向山の中腹にエボシの形をした岩があり、エボシ岩と呼ばれているが、その岩のある土地のことで、戦前は炭焼きで山が開けるとエボシ岩が見えたという。
- 笹 畑 一帯がクマザサで覆われていることから、笹畑と呼ばれた。炭焼きや焼き畑の際もササが多くて作業に手間取り苦労したという。村道降矢戸線から東に笹畑林道が延びている。
- 発 沢 富士講が余沢から登ってきて最初に出会う沢、「初沢」が訛って「ホッサワ」・発沢になったと言われている。昔、富士講が盛んであったことを偲ばせる地名である。

《小永田地区》 — 18

- 小永田 小永田は、事柵からの移住者が切り開いた集落といわれている。明治の末の火災で大半が焼け、詳しい資料は乏しい。小永田の由来は不明である。

- 小永田上 小永田地区の標高の高いところで、小永田地区の畑として利用されている。
- 水ノ久保 吉野地区（12世帯）の住民が、ここから飲料水を引いている。ハケ沢の上流部にあたる。
- 沢 入 小永田を流れる沢に、大川と呼ばれる沢がある。その大川の一番奥まった場所を沢入と呼んだ。地元では「セーリ」と親しみを込めて呼んでいる。この沢には水車が3つ回り麦や雑穀をついていた。ここの水で洗い物をしても手にあかぎれやひびが入らないと有り難がられている。
- ハ ケ 粘土と石の混じった地層のため、所々で崩れている様をハケと呼んだ。ここではコンニャク、ソバ、ダイコン、白菜など自家用野菜が栽培された。
- ハケ沢 ハケから流れ出る水が、沢となって流れる土地。
- 吉 野 この地は葦の茂った野原であったところから「葦野」が縁起の良い「吉野」に変化したのであろう。地元では、「ヨシッパラ」と呼ばれている。大正時代に小永田から一軒移転したのが始まりで12軒ある。名前の由来は不明である。
- 浅久保 この久保には、小さな清水が流れていて美味しいと評判のいい水が流れている。窪みが浅いことから生まれた地名と思われる。
- 坂 東 昔、坂といえば峠を意味した時期がある。この地が峠の東に位置していることから坂東と呼ばれたのであろう。あるいは、坂が東に面していることからこの呼び名が生まれたのかもしれない。富士講の方々が、余沢から白沢を通り、坂東をのぼって佐野峠にいたり大月の七保に下っていった。坂の途中に淵があり、講の人々はここで水に足を浸し旅の疲れを癒したという。坂が東に面していることからこの字が生まれたと思われる。

- 坂東別路 富士講の道が分かれる場所のことで、講は、オボウ山を越え大月のカキノキデローを抜けて富士に向かったという。

- 日向サス 南向きの日当たりの良い沢であることからこの呼び名が生まれた。この場所は、昔からソバやトウモロコシ、桑などの栽培に利用された。山林を先ず焼き畑で開墾し、「切り替え畑」に変える手続きをとる。山林と切り替え畑では税金が違いため、この手続きが必要だった。日向サスは、日当たりが良かったので、切り替え畑が数多く作られた。

- 浄進場 富士講が、この場所で休息をかねて、手や顔を洗い足を水に浸したりしたため、地元では「ショウジンバ」と呼ばれている。精進場が、浄進場に変化したと思われる。奈良倉に登る坂道の途中にあり、この道を富士講の信者が奈良倉山（1349㍻）を越えて富士山に向かった。そこに千枚岩の伝説がある。富山の薬売りが白沢の宿に泊まり、ショウジンバの淵で足を水に浸して疲れをとっていると、盗人に殺され売り上げを取られた。その時薬がこぼれ岩に染みついて今の千枚岩ができたという。

- 奈良倉 奈良倉山（1349㍻）のある場所。奈良という地名は、なだらかな様子を表すので、大きくてなだらかな山との意味から奈良倉山という名前が生まれた。地元では、山頂付近を「おぼうやま」と呼ぶ。雲取山、三頭山からも良く見渡すことができる山で富士講の目印にされた山だった。獅子倉、奈良倉のように三角点のある大きな山に「倉」が付けられている。

- 大白沢 源頭は松姫峠の森から流れ下っている。白沢の支流で一番長い沢という意味で大白沢と呼ばれている。この沢に一番滝、二番滝、三番滝と落差は小さいが滝があり、ヤマメもいい形のものがいたという。沢沿いに寺畑、ホリアケ、ナガクボなどの小名があり、寺畑はいい土地の場所という意味が込められていた。

• 事 榭

この地は早くから人々が住み着き、水の便の良い日当たりの良い土地だった。「ます」は「増す」で収穫を増やしたり、家族を増やしたりと縁起の良いの言葉とされたことから、もともと「子を増す」、集落を増やしていくとの願いを込めてこうした名前が生まれたのであろう。昔、事榭7軒といって小永田の先祖が住み着いたところで、そこには松ヤニを煮て黒みが出てきたら薬草を混ぜて膏薬をつくる家があり、その薬は肩こり、打ち身、怪我の症状を和らげる効果があったという。ここには、良い畑があり、麦や粟、ヒエ、イモ、豆などが収穫できた。

• 横 道

富士講の通った道で、急な坂道でなく、横になだらかに延びた道を横道と呼んだ。

• 釜土沢

この沢の青い粘土質の土が熱に強かったため、炭焼き釜のクド張りや囲炉裏のヒジロ、家の倉壁などに利用された。熱に強く釜土に向いていたためこの名前が付いた。

• ハイマゼ

地元では「ヘーマゼ」と呼ばれている。焼き畑をして灰を土と混ぜ合わせ灰を利用して畑づくりをしたことから、焼き畑にちなんだこうした名前が生まれた。焼き畑では、一年目にソバ、二年目に粟、ヒエ、三年目に小豆、大豆などが栽培され、一ヶ所で三年ぐらい耕作したという。

《中組地区》 (井狩・山沢・大久保) — 13

• 山 沢

この沢の奥地全体の景観から生まれた名前、オオマトイ（標高1409m）を頂とする山から発した流れは、ヤモウ尾根を挟んで左右に流れ下る。大抵の沢は尾根と尾根に挟まれて流れ下るが、この沢は、沢のために山が配置されている印象を与える。

山沢の集落には、移転を重ねた歴史が今も残っている。もともと今の場所に集落が出来るが、水が不便だったので、沢筋に移転することになる。いま古屋敷と呼ばれた一帯に暮らしていた。明治43年の大洪水で家屋が流され、今のところに移り住んだ。古屋敷に住んでいた頃の呼び名が、「ワデ」「オモテ」「メエ」「ニーエ」

「オオサワ」「サー」「キリダシ」などの呼び名で今でも続いている。

- ヒナテ 山沢の対岸で南側に位置し、日当たりが良いことから、ヒナタがヒナテになまったものと考えられる。麦やコンニャクを作っていた。
- 山沢入 山沢の一番奥まったところ。小菅では川に入って行った一番奥地を川入とか沢の場合沢入と呼ぶ。山沢入は、ヤモウ尾根を挟んで、本谷と枝谷に分かれる。本谷には、高畑、イエセザワ、オイノ久保、クワ久保、タカザス尾根、ミズナシザワなどがあり、枝谷には、ヤマザキ谷、ススガテロー、オバンサワなどがある。本谷と枝谷の合流地点に、カミュイドという素敵な場所がある。平将門の一族がここで休んで髪を結ったといわれる場所である。
- 山沢向 山沢地区の向かいに面した、山の斜面の土地をこの様に呼ぶ。
- 大六天 ここに山沢神社やお不動さんが祀られていることから、この名前が生まれたと思われる。昔からこの一帯を大六天耕地と呼んでいる。
- タノモクリ 地元では「タナモックリ」と呼ばれている。この大地は三段の棚から成り立っており、上の二段に集落が形成されている。近くで見るとはよみとれない地形の特徴をどこか高い場所から正確に判断して、段々と続く高地に一番上に盛り上がったところがある様子を「タナモックリ」と呼んだのであろう。その「タナモックリ」が「タノモクリ」に変化したのであろう。
- 大久保 昔、芝山で畑に出来るところは少なかった。この地区で一番大きな窪地になっていることから、大久保と呼ばれている。現在、畑やグラウンドとして利用されている。春地の畑が多く、雪が遅くまで残った。ジャガイモ、トウモロコシ、菜っ葉などが作られた。

- 梅ノ木平 梅が植わっていたことから、こう呼ばれている。現在は主にソバ畑として利用されている。

- マフジ久保 藤の種類に紫色の花を付けるマフジと呼ばれるものがあり、このマフジが多く生息していた窪地。小菅で最も多い藤はマフジである。農耕用の縄の代用品としてこのマフジがよく利用された。

- 井 狩 この地区には大昔湿地があり、多くの鳥が飛来した。とりわけ山鳩が多く集まった。昔、鳩を「イカル」と呼んだ。鳩が多く集まるところ、「イカルの地」が「イカルノ」「イカリ」に変化した。また、この地区に流れ込む沢は、大雨の時、堰にぶち当たり大きくうねり、まるで怒ったように流れ下った。水が怒り狂うさまから「イカル」という呼び名が生まれたのであろうか。

- 井狩原 地元の人、「イカリッパラ」と呼んでいる。昔ここに、池や湿地があり、多くの鳥が集まったという。井狩地区の畑があるところで、現在も畑として利用されているし、村営住宅も建てられている。

- コセド 裏側のことをセド（背戸）と呼んでいる。コセドとはすぐ裏手のことで、ずっと離れた裏手のことをオーセドと呼ぶ。

- 川上沢 井狩沢の上流部にあたる。井狩の地区から見ると、川上にあたることからこう呼ばれているが、山沢入りなど「〇〇入り」という呼ばれ方もある。

《田 元》 — 12

- 棚 沢 棚とは段々となって下り降りる流れのことで沢全体が傾斜のきつい流れから棚沢と呼ばれた。獅子倉山からヤチグラの滝のすぐ下流で小菅川と合流する。

- 淀 川がゆっくり流れる様を淀むといい、曲がり淵を中心に大きな湿地帯が広がっていた。淀の近在は夏には蛍やヒキカエルでにぎわったという。

- 高 淀 淀の北側の山手が高淀で、畑には麦やサツマイモなどが作られた。
- ドウドコロ 平山の対岸に位置している。古老の話によれば、昔この地の上に寺地と呼ばれる土地があったという。その当時の寺のお堂がこの地にあったことからこの名前が生まれたものと推察される。また、川沿いの窪地に湧き水があり、この地に踏みいるとドロドロしていたことからこの名が生まれたとも考えられる。
- 転 石 急斜面の畑が広がっており、大きな石がいっぱいあり、落石の多い場所。地元では、石が落ちることを石が廻るという。「廻る」が「転ぶ」に変化してこの地名が生まれた。
- 竹ノ沢 この沢に竹林があった。ここが、小菅で最初に竹が生えていたといわれており、小菅の竹はここから広がったといわれている。このサワの上流にお寺があって、明治43年の大洪水でお寺が流され、金の阿弥陀様が川原に埋められたという言い伝えがある。
- 平 山 川向こうの平らな場所で、河岸段丘から生まれた土地。淀から平山一帯は松林に覆われ、ハツタケがよくとれたという。平山には桑畑が多くあった。
- 腰越え 川を越すのに橋が架かっていなかった時代に、腰まで浸かって対岸に渡ったことからこの名が生まれたと思われる。この辺りまでくると、水量も多くなり流れの緩い深いところを渡ったと考えられる。松林が多いところで、曲淵という大きな淵があり、そこに大きな一本橋が架かっていた。渡るときに用心しないと落ちて大怪我をすることから、その一本橋を用心橋と呼んだ。
- 田 元 この集落は、大菩薩から延びた大きな尾根の麓（ふもと）に位置している。袂（たもと）にも山の麓という意味がある。この「袂」から「田元」へ転じたものと思われる。ヤムラ屋敷という平らな原があることから古くから集落があったと思われる。

- 池ノ尻川原 池ノ尻に続いた川原の土地。小菅川は暴れ川だったので、川の両岸に同じ地名がある。川の流れの変化によってその地名が生まれた。
- 田元上 田元地区の上で、「オオワゼ」「シタワゼ」という屋号が今も残っているが、上手（うわて）が「ワデ」に訛り、「ワデ」が「ワゼ」に変化したと思われる。
- 田元原 日当たりは麓なのであまり良くないが、田元地区の畑として利用されている平地。ジャガイモ、トウモロコシ、ダイコンなど自家用野菜が作られている。

《川 池》（川久保・池之尻・今川） — 12

- 池ノ尻 曲り淵という大きな淵があり、その池のように大きな淵の尻に位置した土地を池ノ尻とよんだ。もっと昔は、曲り淵に続く池や湿地が大きく広がっていたと考えらる。昭和9年頃の大きな台風の際、川底が2桁ぐらい下がったといわれており、洪水や台風で地形は大きく変化したと思われる。
- ナツチ この地区の土地では一番日当たりのいい場所。麦を中心に大豆、ヒエ、粟等を栽培していた。
- 小 峯 城ノ沢と竹の沢の間に位置する小高い峰で、お寺の真上にある。切り替え畑があり、ソバ、粟、小豆などが作られていた。
- 獅子倉 集落の外の危険なところは危険を知らせる地名がつけられた。地崩れしやすい地をしめす「しし」、崖を表す「かき」、低湿地を表す「たい」等がある。その「しし」が「獅子」に変化したと思われる。丹波山は、「鹿倉」と呼んでいる。
- 川久保 小菅川に沿って出来た小さな河岸段丘で、大きくは二段を形成している。具体的には小菅村役場付近から川原に向けた一帯を指し、小菅精機のある付近の窪んだ一帯を指して川久保と呼んだと思われる。

- カツ久保 中程にアラクラという沢があり、石がごろごろしており、急な荒れた沢である。カツラが多かったので、カツラ久保がなまってカツ久保になったのかもしれない。特にこのクズは育ちも品質も良く評判のクズだという。

- イツ沢 「一本沢」が「イツ沢」に変化したものであろう。オオダワ峠と古老が呼んでいた峠に大きな塚がある。その付近をから丹波山に下った辺り一面をイツ沢と呼ぶ。丹波山と小菅の境は、オオダワ峠から数百歩丹波山に下ったところにある。

- 今川 宮川の上流部にあたり水の量は少ない。今川峠の名前もここから来ている。なぜ今川と呼ばれているのかは不明。

- 日向今川 今川の沢に沿った場所で一番日当たりのいい土地。畑は広く麦、コンニャクを中心に養蚕のための桑などが栽培されていた。

- 宮川 やぎゅう神社の前を流れることから、宮川と呼ばれている。禁漁区となっており、道路端からもヤマメの姿を見ることができる。

- 岩花 平将門伝説に絡む場所で、大月の七歩に潜んでいた将門が敵の追手に追われ、牛ノ寝の狩にかくれていたが隠れきれず小菅に下り、敵に追われて放たれた矢が岩に無数に突き刺さり、あたかも花のように見えたことを指している。ここから今川沿いに「血の久保」「一戦場」「逃げ延び」（シゲノブ）などの場所がある。

- 川久保向 川久保の向かい側にあたる。小菅橋を渡った正面の山手の部落。

《橋立》 — 18

- 中河原 小菅川は昔暴れ川であったが、その上流の橋立付近は今ほど川底は低くなく、川原が広がっていたと思われる。今も中川原、下河原と呼ばれる地名が残っていることからその川原の広がり想像できる。

- 天ノ久保 橋立には小菅で最も景観の優れた傾斜畑がある。地元では上の山という親しみを込めた呼び方をしているが、その地続きにこの天ノ久保はある。付近に八幡神社があることから天の文字を頂いたものと思われる。久保は窪みのことである。
- 上の山 この畑を見上げると思わず息を飲んでしまうほどの存在感のある畑が続く。橋立の人々が利用する畑で、部落のすぐ上に位置した。しょっちゅう利用するので、親しみを込めて上の山と呼んだ。最盛期にはコンニャク畑が尾根近くまで延びていた。
- 橋立 この地名の由来はいろいろある。昔この地区の特産として箸を産出した。作った箸を立てかけていたことから橋立と呼ばれた。また、宮川を横切る橋が洪水で流され逆さになったので、元通りに改修して橋を立てかけたことから橋立と呼ばれた。さらに村のお不動を建てる場所を決めるのに箸を立てて決めたことからこの名が生まれたという。
- 上割間 地元では、「カミナッチ」と呼ばれている。上の山と地続きの上手にあたる日当たりの良い場所である。昔ここに由緒のあるお寺があったという。上割間は、土地の区分が線で引いて様に正確にほぼ同じ広さで整然と分かれていることから生まれた。
- 中丸 地元ではこの地名はあまり知られていない。地元では、この一体を「ニイジャヤマ」と呼んでいる。
- 西沢 地元では「ニイジャ」と呼ばれている。橋立地区の西に位置した小さな沢が流れている場所である。
- 清水 水の久保沢というきれいな水が流れている。この沢は西沢に合流する。
- 竹ノカヤ 地元では「タケノケエ」と呼ばれているが、この地は、深く切り込んだ地形を持つが、全国各地で深い気の込みの谷を峽というこ

とからカイがケエに訛ったものと思われる。

- 小 仏 仏を葬る墓地のある場所から、この名前が生まれたと考えられる。
- 小 沢 小さな沢が流れるいる場所だが、地元ではこの沢は「ホッサワ」と呼ばれている。この沢は清水が流れていたり、伏流水となって沢が干し上がっていたりする。沢が干すことから「ホッサワ」が生まれたと思われる。
- 甲斐渡戸 地元では「ケーワタド」と呼び、甲斐の国（甲府）へ旅立つ出発点にあたる。棚倉からショナメに出て、牛ノ寝を通り、石丸峠を抜けて甲府へ向かった。
- 田 口 わさび田がここの入り口にあることから、この名前が生まれたものと思われる。
- 川 入 「カワイリ」と呼ばれ、小菅川の上流部にあたる。雄滝は、昔魚止めの滝と呼ばれており、この滝から上流は昔踏み入り人もいなかった。今は都の見事な水源林が広がっている。
- 橋立向 橋立地区の向かい側の山の斜面。
- 鯨 沢 尾根が鯨の形をしていることから、鯨沢と呼ばれている。地元では、鯨尾根のことを「クジラオ」と呼んでいる。
- 菅 平 植物の「菅」が一带に自生している平地があることから、この呼び名が生まれたのであろう。
- 渡茶ア 昔、川を渡って仕事に通った。地元の言葉・「渡っちゃあ」からこの名が生まれたのであろう。この地に今は希望の館が建てられている。

《長作地区》 — 20

- 鶴 峠
鶴川の源頭で昔、西原村大羽峠から遠望すると、鶴が羽を広げた姿に見えた事からこの名前が付いたという。また、その昔この峠道は、今とは反対の尾根に取り付けられていて、カズラの蔓のようにくねくねと曲がっていたことから「ツル峠」と呼ばれていて、近年「鶴峠」に変化したともいわれている。この峠で多摩川と相模川の分水になる。また、この峠は本村と長作、西原、上野原との重要な交通路として利用された。また、東京のあきる野方面とも、三頭山を超えて通じていた。車の通行が可能になったのは、昭和30年代である。

- 栗 山
昔この一帯は多くのクリやナラの木で覆われていたので、栗山と呼ばれた。一時、開拓され畑として利用された時期もあった。現在も畑がある。

- 奥ノ茅
茅葺き屋根の茅を吹くための茅畑があった場所。南向きの大きな畑があり、長作の茅葺き屋根の吹き替えには、この茅が利用された。

- コヤケ
地元では「小谷毛」の漢字が当てられている。鶴川の源頭に位置する小さな谷からこの名が生まれたのであろう。この谷は昔から地元の人々にとっては、恵みの谷であった。炭焼きを中心に良質の樺、シオジが産出し樺は電柱の腕木として、またシオジは、野球のバットとして広く活用された。この谷には、中ノ沢、桧木尾根、金山、登り尾、日陰ザス、小谷毛坂等の小名が残り、天狗滝や天狗岩を見ることができる。特に天狗に関わる民話が幾つも残り、この谷の奥行きの高さと山の賑わいを伝えている。

- 御堂街道
長作観音堂に通じる道。本村から鶴峠を越え、ここを通過して観音堂にお参りした。地元では「ミトケイド」と呼んでいる。観音に通じる道を御堂街道と呼ぶなど、昔から地元の人が長作観音堂をいかに大切にしていたかが偲ばれる。

- 神 楽 この谷に長作観音堂の「古観音」と言われるところがある。ここに観音様が祀られていた時代には、霊をなぐさめるための神楽舞が奉納されたのであろうか。観音様にちなんだ名前として興味深い。
- 神楽入 神楽谷の奥まった場所で、現在、観音様が祀られている。昔はここに観音堂が立てられていたという。育ち石があり、夫婦岩、観音滝（音無しの滝）、荷渡し場など昔の賑わいを偲ぶ地名が今も数多く残る。
- 吉 原 ここは昔葦の育つ河原であったので〔葦原〕が縁起の良い「吉原」に転じたのであろう。観音様の生前の姫様の御名は皇女吉姫で、吉姫が葎を敷き、難儀のためお休みになった場所であるとのいい伝えがある。地元の人はこの場所を吉原耕地と呼んでいる。
- 牛 飼 面白い言い伝えが残っている。昔、小菅村と隣の西原村との境を決めるのに、双方の村から夜明けに牛を出発させ、その牛が出会った場所を境にするという取り決めが成立し、その結果、現在の境界が出来たという。地名の由来に関しては、牛が出会ったところ、一いとう意味の牛会が、牛飼に変化したものと思われる。地元では、「ウシガエシ」と呼ぶ人もいて、牛返し、つまり牛が出会って引き返したことからこういう別名もある。
- 大長作 三頭山から流れ下る長作地区で一番長い谷が、大長作谷である。このためこの地区を大長作と呼んだ。ここは、肥沃な土地も多く、明治、大正、昭和と谷のかなり奥まで開墾され、雑穀や野菜が作られた。上野原町西原との境に位置するが、天狗岩や「からん田」等の地名も残っていて、今なお爽やかな風が吹いている。
- 小米沢 江戸の末期から明治の中ごろまで、この耕地は比較的平地で日照時間も長く、数年間水田が作られた。米の収穫は少なかったので、小米沢の地名が付けられたといい伝えられている。
- 打 越 昔、十文字峠に向かう人々が一休みするのに利用した小さな平地

を中心にした場所をこう呼んでいる。昔は、タバコの火をつけるのに火打ち石を利用する人がいた。火打ち石の石は、小谷毛谷の赤石といって固くて強い石があり、その赤石を打ってタバコに火をつけて一服し峠を越えた逸話からこの地名が生まれたという。

- 倉 骨 倉骨耕地は肥料のなかった時代、小菅村の一等地三ヶ所の一つに数えられた穀倉畑であった。穀倉が、倉穀、倉骨へと変化したとも考えられる。
- 長 作 ここは鶴川の源流部の両岸に開けた谷筋の平坦な地形が続く。昔農耕文化が広がり始めたころこの谷が農耕の中心地になったと思われる。耕作場が続く長い谷が幾つも見受けられたのであろう。長い谷と耕作場とが絡み合っ「長作」という地名が生まれたのであろう。一ノ瀬川にも源流域に作場平という地名があり、平らな耕作場からその地名の由来がきている。
- 前 原 ここでは、神楽が基準となり、神楽の前に位置し、平らな土地があったので、前原とよばれるようになった。長作では、この神楽と御鷹神社が集落の拠り所として大切な位置を占めている。
- 前原上 前原の山側の高い場所を指して、前原上という。
- 森 向 森向かい御鷹神社の森が基準となり生まれた地名である。御鷹神社の向かい側にあたるので、こう呼ばれるようになった。
- 森の上 御鷹神社の森の山側の上の方にある土地。
- 井戸沢 井戸沢は自然の流水を利用し、数戸が井戸水の如くに利用していたことから、この名前が付いた。
- 秋 切 昔山仕事といえば炭焼きか焼き畑、材木の切り出しなどが主であったが、この土地は、日陰の所も多く、炭焼きも焼き畑も秋までで仕事を切り上げることから、秋切と呼ばれた。

□ 小菅村の沢とその由来について

① 小菅川左岸

- 大成沢 ここは、昔、奥多摩や丹波との出入り口だった。大成は、ナルい傾斜地を表しているが、その集落から流れ出している。
- 大茶沢 開墾地としてお茶が植えられた。この沢には棚口と呼ばれる滝が流れている。
- 棚 沢 地形が階段状になっているなかで緩い傾斜の場所を棚というが、かなりの傾斜を尾根から河原まで流れ下る。
- 桃ノ木沢 鹿倉山から流れ下る沢だが、名前の由来は不明。
- 竹ノ沢 竹が繁茂しており小菅の竹はここから広がったといわれている。
- 獅子倉沢 鹿倉山から流れ下る沢。ししとは、荒れ地や崩壊場を意味した。
- カズ久保沢 中程にアラクラという悪場を持つが、この一帯にはカズラが多かった。
- 前 沢 この沢は、今川峠を巻くようにして流れるが名前の由来は不明。
- 今 川 今川集落の近くを流れ下るが名前の由来は不明。
- 西 沢 橋立の西に位置する。地元では、「ニイジャ」と呼ばれている。
- 竹の貝 地元では、「タケノケエ」と呼ばれている。カイは深く切り込んだ地形を表す表現である。
- 小 沢 小さい沢のこと。地元では、「ホッサワ」と呼ばれている。流れが伏流水となり、沢が干しあがることからこの呼び名が生まれたのだろう。

- 田口沢 田のないところに何故田口が生まれたのか不明だが、ワサビが栽培されているのでワサビ田に関係しているのかもしれない。
- 大田倉沢 オオダグラとよばれているが、由来は不明。
- 中黒茂沢 泉水谷には、大黒茂谷があるが、周辺に檜やモミ、ツガなど針葉樹の場合、こうした呼び名が生まれる。また、苔が覆う場合にもこうした名前が付けられる。
- 儀助沢 炭焼きかワサビ田の仕事に従事していたお祖父さんの名前という。
- 白糸沢 白糸の滝のある沢。この滝は昔は今倉の滝と呼ばれた時期もあったというが、明治時代にここを訪れた藤村県令がこの滝を見て白糸の滝と命名したと言いつたされている。
- 今倉沢 今倉山から発している沢。
- 赤沢 赤沢には、幾本かの支流が流れ込んでいるが、その中に赤い岩の沢があったことから、この名が生まれたという。
- 布小屋沢 赤沢の支流であるが、人間の生活に関連している名前だが、由来は不明。
- 花ノ木沢 素敵なお名前だが、由来は不明である。
- 矢下沢 本流に流れ込む沢の中で、谷の切り込みが最も深い。山と山の深い切り込みを谷（や）といい、（や）が矢に変化したのだろう。
- 日向沢 雄滝のすぐ下流に流れ下る沢で、南向きの日向にあたる。
- 鳥小屋沢 小菅川との出会いに、姿の滝がかかっている。沢は長く、胴切り尾根の東斜面から流れ下る沢である。

- フルコンバ沢 周辺の木材を切り出す際の集積場に利用された。このすぐ近くに水場があることからここは重宝された。古木場が訛って「フルコンバ」になったのであろう。そのフルコンバを源頭にもつ。
- 山入沢 フルコンバ沢の支流にあたる。比較的穏やかな傾斜の沢であることから、沢から山に上り詰めるのには便利だったのだろう。
- 金場沢 フルコンバ沢の支流の一つでこの沢にも金を試掘した大きな穴がいまも残っているとされている。源流一帯には、金場沢は幾つかある。
- 大谷沢 フルコンバ沢の支流で一番大きくて切り込まれた谷。谷の大きさからこの名が生まれたのだろう。
- 紅葉沢 名前の通り、この沢沿いにイロハカエデ、ヤマカエデ、ハウチハカエデなどのカエデ類が多く見られる。
- 見晴沢 荷渡し場から少し下ったところに見晴沢の水飲み場がある。ここからは、熊沢山や牛ノ寝が良く見渡せる。
- 熊 沢 小菅川の源頭の妙見の頭に通じる沢である。最も奥地で熊のいそうな場所である。

② 小菅川右岸

- 玉 川 三頭山を源頭にもつこの川は、池ノ平付近で一旦伏流水になるが、再び、清流となって顔を覗かせる。玉には、美しいともとのの意味もある。キラキラ光る流れをこう呼んだのであろう。
- アシ沢 地元には、ここを訪れた玉姫がここで足をあらったといわれている。河原に葦が茂っていたのかもしれない。
- 熊切沢 熊に出くわした猟師が釜で熊を切ったと言い伝えられている。

- ナツチ沢 日当たりのよい土地を夏地と呼ぶ。この沢はそこを流れる。
- 小玉川 この沢は、本流に流れ合流する。同じ三頭山から流れ下る小さな玉川という意味。
- 井狩沢 井狩地区を通過して流れ下る沢。
- 山沢川 この沢には、大きな山が控えている。その尾根筋から清流がこんこんと湧いている。沢沿いに、清流を利用したワサビ田が綺麗だ。
- ナガサス 牛ノ寝から小菅村に向けて大きな尾根が迫り出しており、その尾根にモロクボ平という平坦な尾根があるが、このナガサスはモロクボ平の西斜面から流れ下る。村の近くの沢で山葵谷利用されている。名前の由来は定かでない。
- クジラ沢 沢の上流部の尾根の形が、鯨に似ていることからこの名前が生まれた。
- 棚倉沢 牛ノ寝から流れ下る沢で、階段状に流れ落ちる奥行き深い沢。
- マサキ沢 ショナメからマサキ尾根がのびているが、マサキ尾根と平山尾根の間を流れ下る。名前の由来ははっきりしないが、正木の木があったのかもしれない。
- カリバ沢 牛ノ寝に狩場といわれる場所がある。小菅は昔から猟が盛んで獲物がいた場所を示す。その狩場から流れ下ることからこの名前が付いた。
- 平山沢 牛ノ寝から平山尾根がのびているが、その平山尾根を流れ下ることからこの名前が生まれた。
- シオジクボ 小菅川の上流部にシオジの美林が広がっている。この沢に見事なシオジの林があった。沢の特産物が名前の由来になった。

- カルメクボ 小菅では沢ぐるみをカルメと呼ぶ。その沢ぐるみが牛ノ寝の稜線まで駆け上っている。沢の特産物が名前の由来である。
- アカドチ沢 この沢の周辺に赤い粘土質の土がある。赤土がアカドチに訛ったのであろう。現在この地は、シオジの天然更新の研究が成されており、注目の沢である。
- 玉蝶沢 なかなか素敵な名前である。源頭に大きな岩が露出しており、そこに美味しい水が湧いている。水辺に蝶が舞い、その蝶の姿が美しくしかったことからこの名前が生まれたのであろう。
- シンナシ沢 源流ロマン回廊の通り道に当たる。深くえぐられた谷は上流部には水はない。この沢の由来は不明である。
- 天狗棚沢 古代人はなかなか素敵な名前を付けたものである。この沢が小菅川と合流するあたりは、深い森と谷に包まれている。鼻を大きく伸ばした天狗が羽織袴に高下駄はいて、人間の踏み入ることのない谷の尾根筋をポーンポーンと駆けていく。この出会いに立つとそんな思いに駆られる場所である。この沢を上り詰めたところに天狗棚山と天狗の頭がある。
- 熊棚沢 棚とは段々と流れ下る様を指す。小菅川の最も奥にこの名を冠した沢があり、その沢を上り詰めると熊沢山がある。人間の住まいから最も離れたこと炉の奥の沢にこそ熊が安心して棲んだのであろう。
- 棚 沢 急峻な山肌を転げるようにして流れ下る沢。滝沢という名前の沢にそっくりなのか。沢全体が棚という意味だろう。
- シラベ沢 この一帯は、コメツガやシラビソの林に覆われている。シラビソがシラベに変化したのであろう。

《白 沢》

- 発 沢 富士講沿いの沢で余沢に降りてきた信者が、白沢に向かう最初に出会う沢。初が発に転じたのであろう。
- 笹畑川 三頭山から鶴峠に尾根がのびているが、その尾根の途中から、オマキ平にのびる尾根が走る。イタチオドリからオマキ平にかけての傾斜地を笹畑と呼ぶ。その笹畑を流れる沢。
- 大白沢 松姫峠付近から流れ下るこの沢は、白沢川の中で一番長い。長いことは大きいことを意味しており、この名が生まれた。
- 奈良倉沢 昔、奈良倉山は富士講の歩いた山である。この山を越えて大月へ出て富士吉田と向かった。ここの沢の源頭は奈良倉山であることから、この名が生まれた。
- ナカノサス この沢は二つに挟まれた沢である。両側の間隔が狭いことから、二つの中との位置づけがでたのであろう。
- カマツチ沢 この沢に青い粘土質の土があり、熱に強かった。この土は倉の壁や囲炉裏、炭焼き釜のクド張りなどによく利用されたという。いまでも、この土が利用されている。

《長作地区》

- ハナオリド 猟師の仲間にこんな言い伝えがある。腕利きの猟師がここでしくじり、鼻を折られたという。こうした逸話からこの名前が生まれたという。
- 小米沢 小菅は日当たりが悪いため、気温が低く、稲作にはむいていなかったが、この沢は南向きで暖かったことから、田んぼがあった。しかし、水温が低いことから収穫が悪かった。少しの米しかとれなかったことからこの名前が生まれた。

- 井戸沢 長作の集落の井戸水として利用されたことからこの名前が生まれた。
- 秋切沢 この沢は冬になると日当たりが悪くなる。山の仕事を秋で切り上げるようにという古代人のメッセージが込められた素敵な沢である。
- 大長作川 長作の沢の中で一番長くて大きな沢であることからこの名前が付いた。この沢の源頭は、三頭山であるが、水は豊富で日当たりもいい。谷は大きく開いており春先から秋口まで爽やかな風が吹き抜ける。
- 神楽沢 沢の名前にこんな素敵な名前は数少ない。昔、ここに由緒ある観音様が祀られており、お祭りにはお神楽が奉納されたのであろう。いまも、ここには古観音が祀られている。
- コヤケ沢 この沢には、金堀場や登尾根、天狗岩や天狗の隠れ滝があるなど村人が頻繁に出入りをした痕跡を多く残しているが、名前の由来は不明である。
- オキノカヤ 昔はどの家も茅葺き屋根だったことから、ここに茅取り場があったことから、この名前が生まれた。

謝 辞

この調査研究にとうきゅう環境浄化財団から多大な援助を頂いた。この支援なしにこの調査・研究は不可能であった。心から深く感謝したい。多摩川源流の虜になってから早いもので8年の月日を重ね、源流の谷に700回をこえる源流行きを繰り返してきた。源流でしかできないこと、源流だから出来ること、それは繰り返し繰り返し源流に会いに行くことである。きわめて単純なこの事実を飽きることなく繰り返してきた。

3年前に「多摩川源流絵図」塩山丹波版が完成し、今回同じく「源流絵図」小菅版が完成した。多くの方々の協力と支援のたまものである。ひたむきな取り組みが評価されて、小菅村に多摩川源流研究所が設立され、その初代所長を任された。多摩川源流に出会えて良かった、小菅村に出会えて良かったとつくづく思う。特に今回の調査・研究は、小菅村あげての協力が大きな支えとなった。廣瀬文夫村長をはじめ源流研究所の佐藤英敏事務局長、井村礼恵主任研究員、多摩川源流観察会の石川重人副会長、雨宮清貴事務局長等々に本当にお世話になった。心からお礼を申し上げたい。

2002年3月

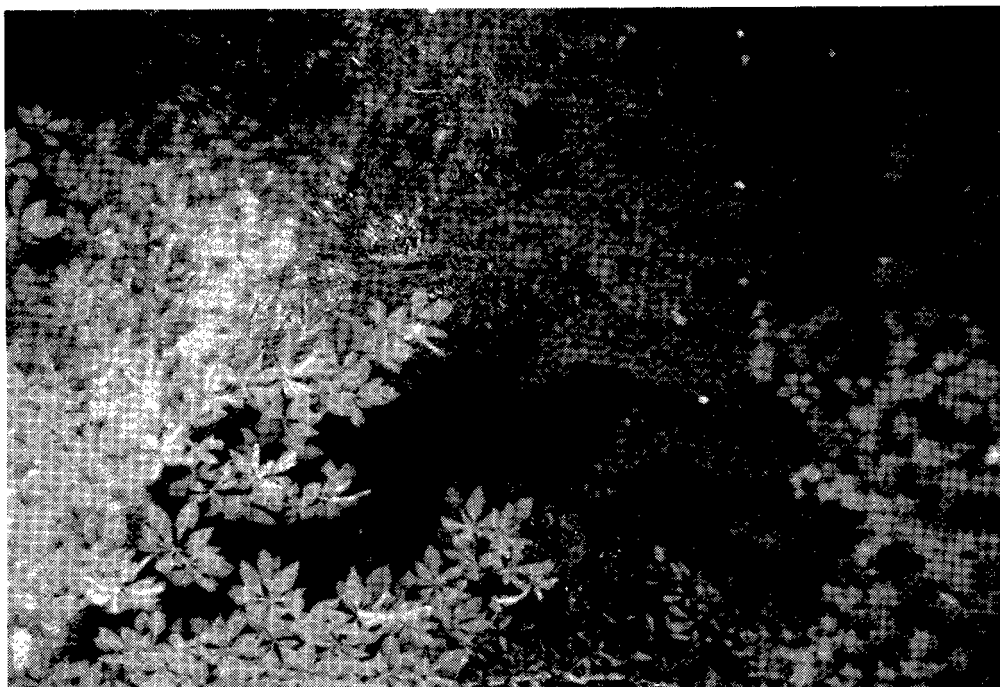
多摩川源流研究所

所長 中村文明

〔 資 料 1 〕

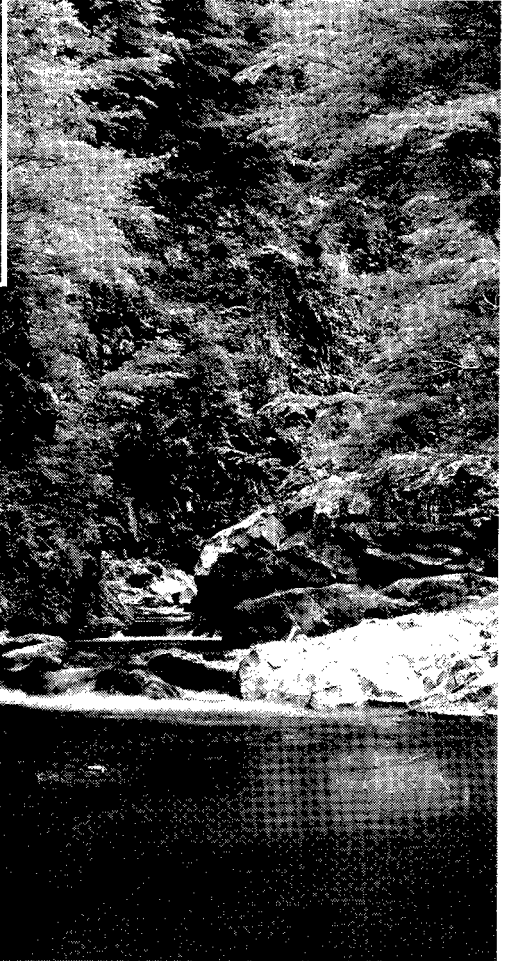


古橋場の淵



釜ッ淵

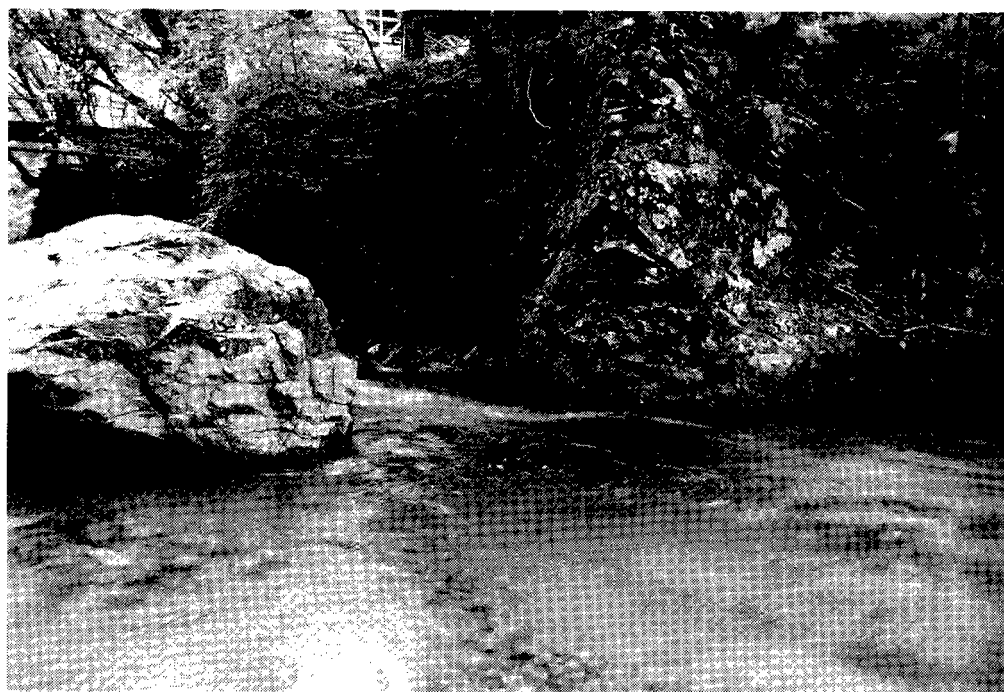
ヤチグラの滝



蛇石



平山淵



ドウドコロ淵

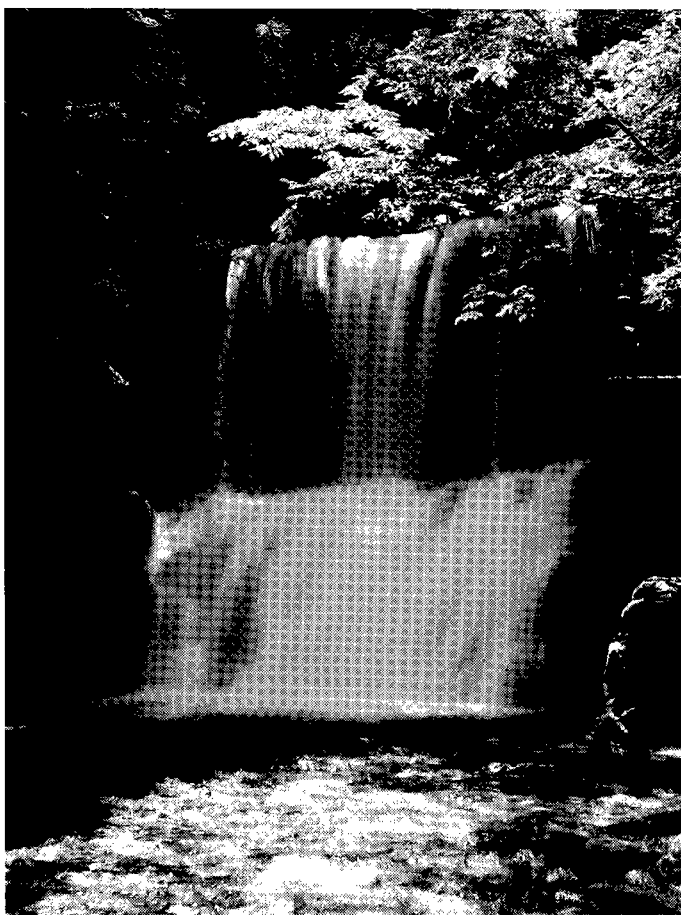


三太郎淵

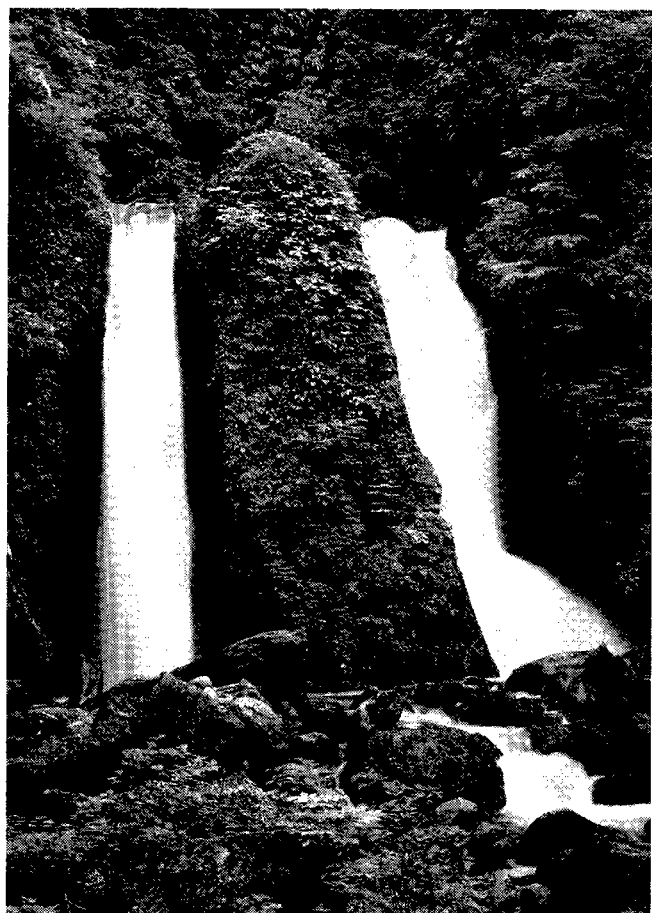


瀬干し

一番堰堤



二番堰堤



雄滝



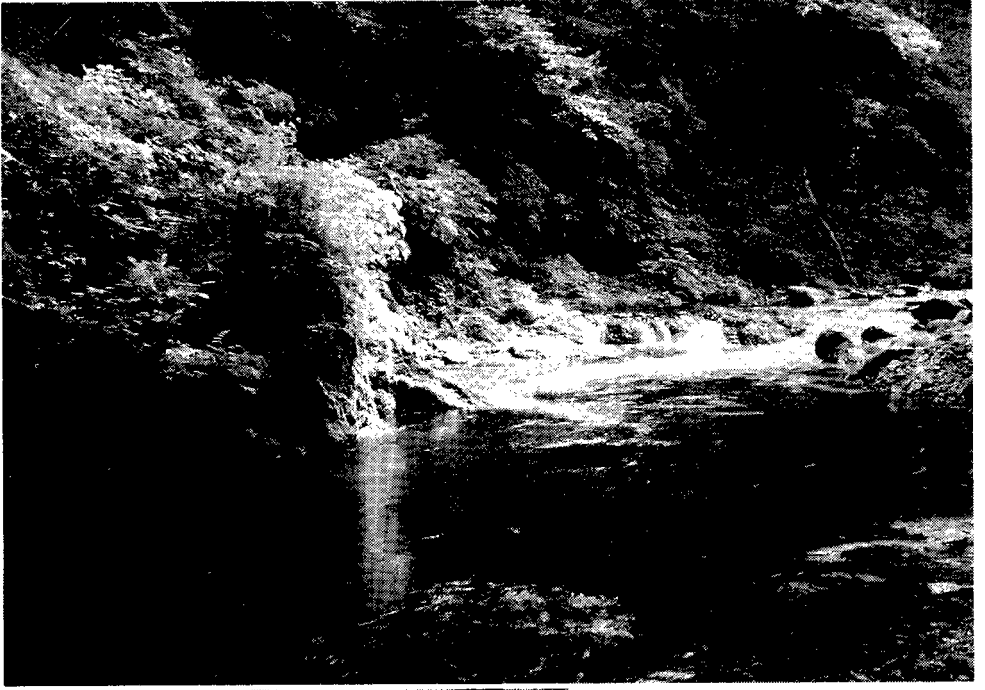
白糸の滝



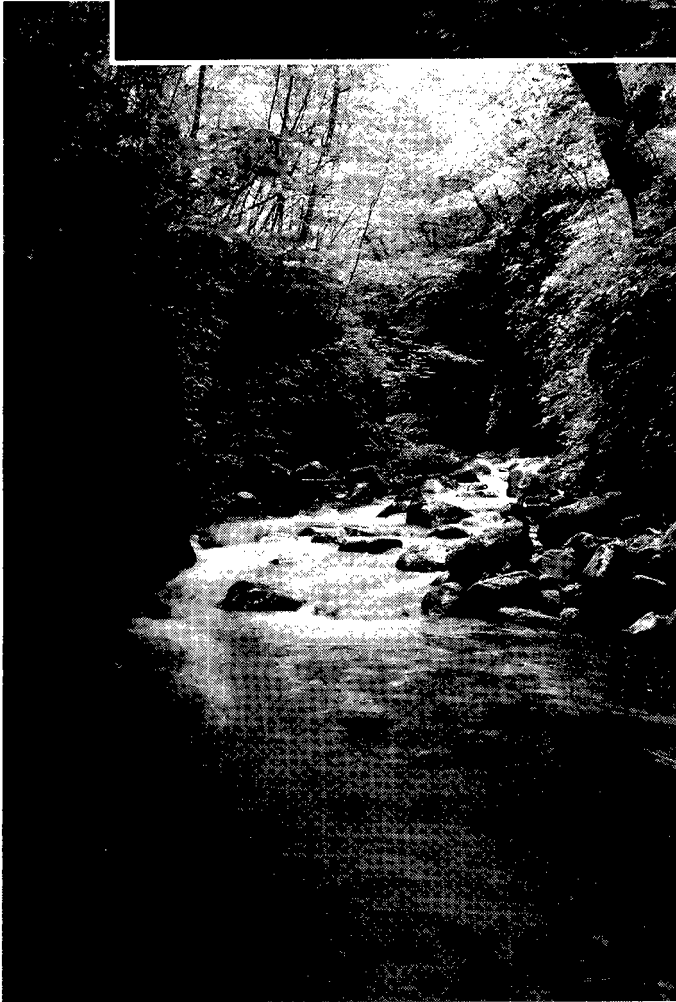
木下淵



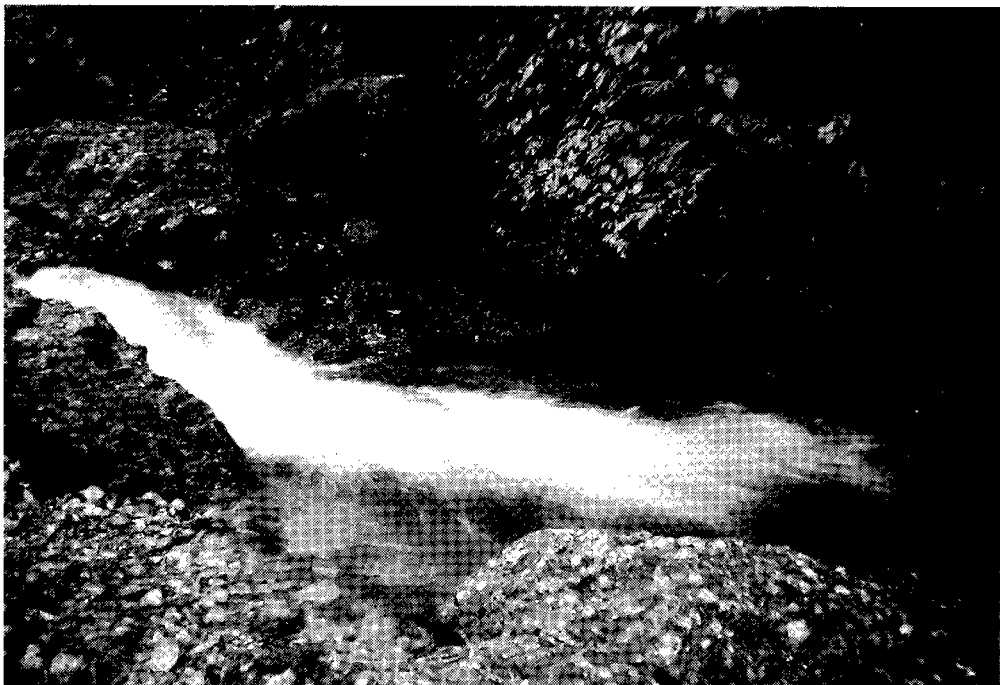
赤沢出会い下淵



山の神付近



赤沢出会い淵



たわむれ淵



釜淵



のぞき淵



瞳淵



2本シオジ



第6エンティ

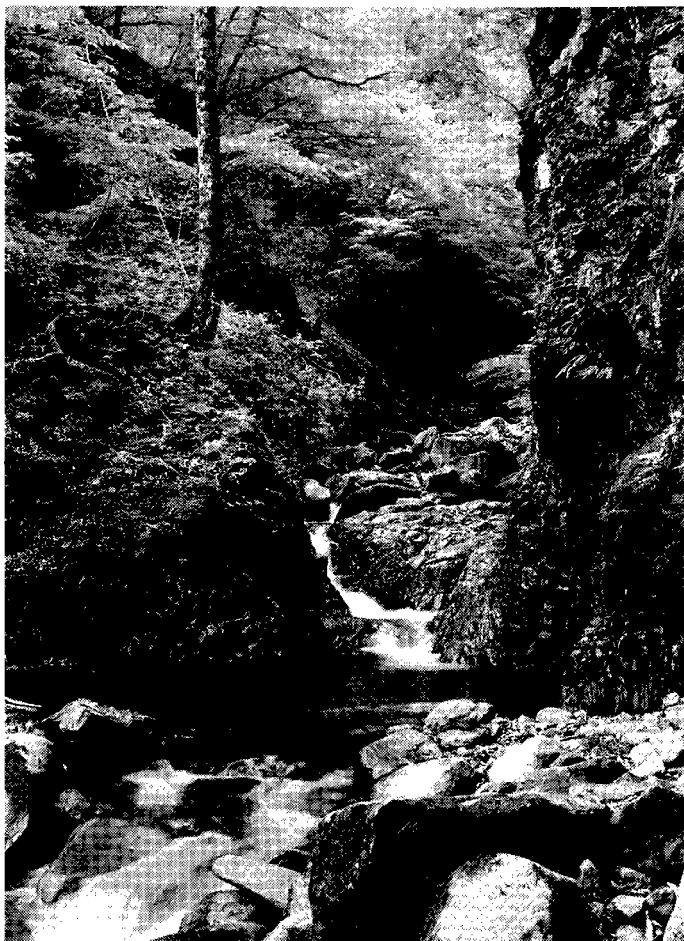


カモシカ立ちの岩



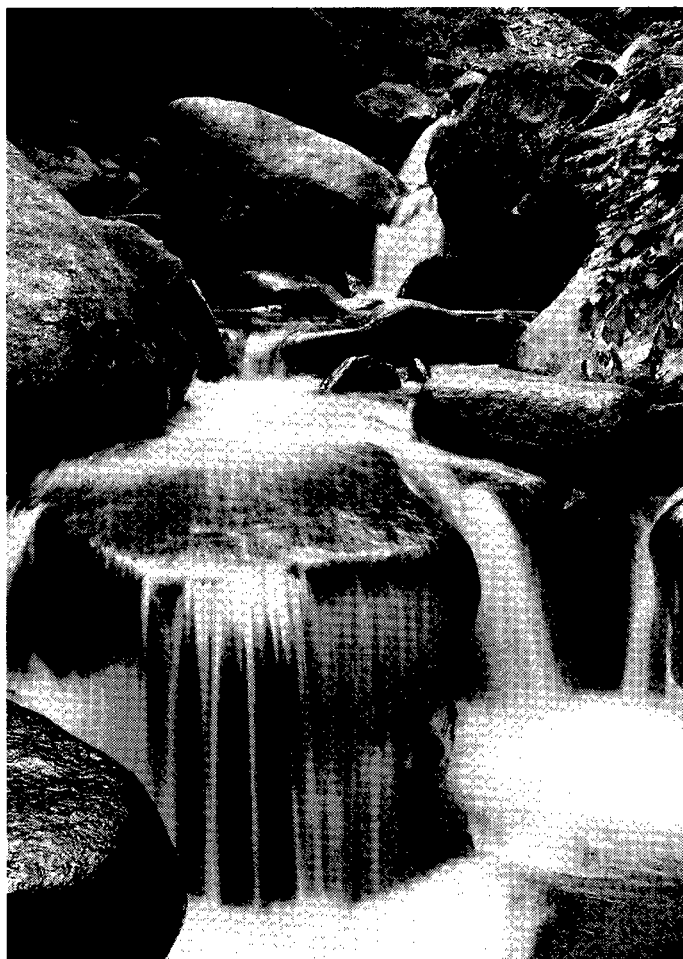
カモシカ立ち

カモシカ立ちの無名淵



カモシカ立ち付近





無名の流れ
(カモシカ立ち上流)



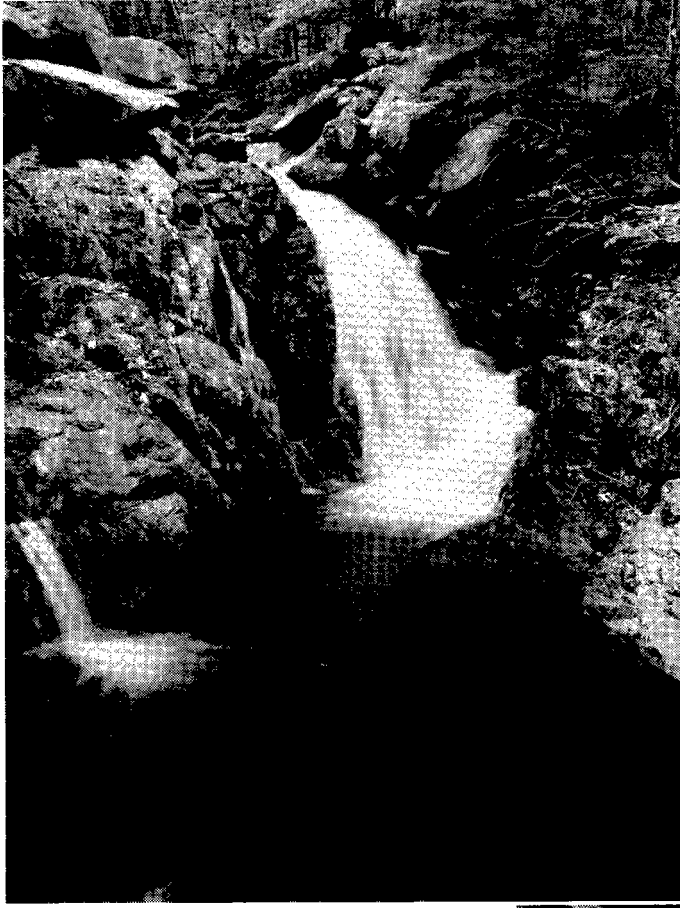
雄滝上流の無名滝



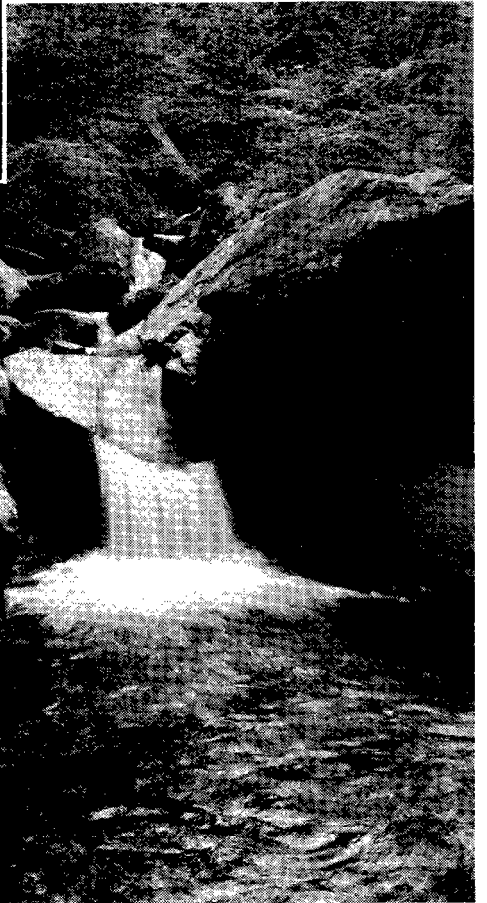
鳥小屋出会い滝



無名滝



無名淵
(鳥小屋淵)



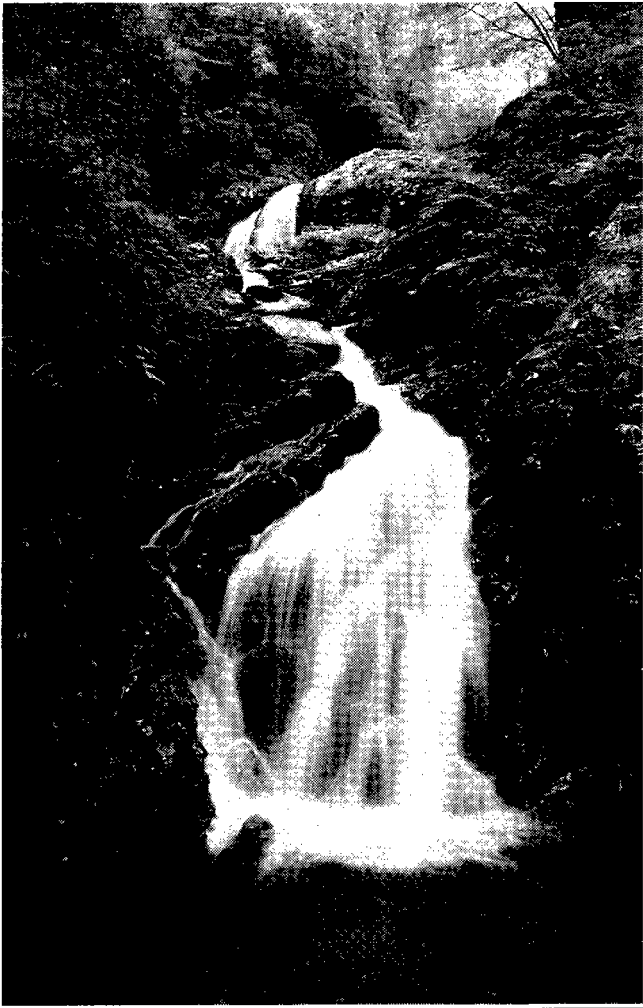
無名淵



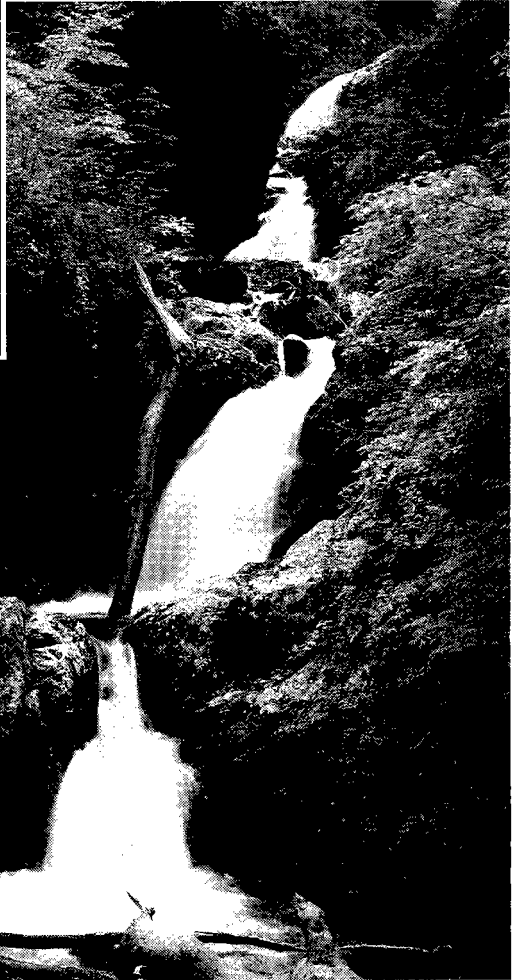
無名淵



ゴ-ロ

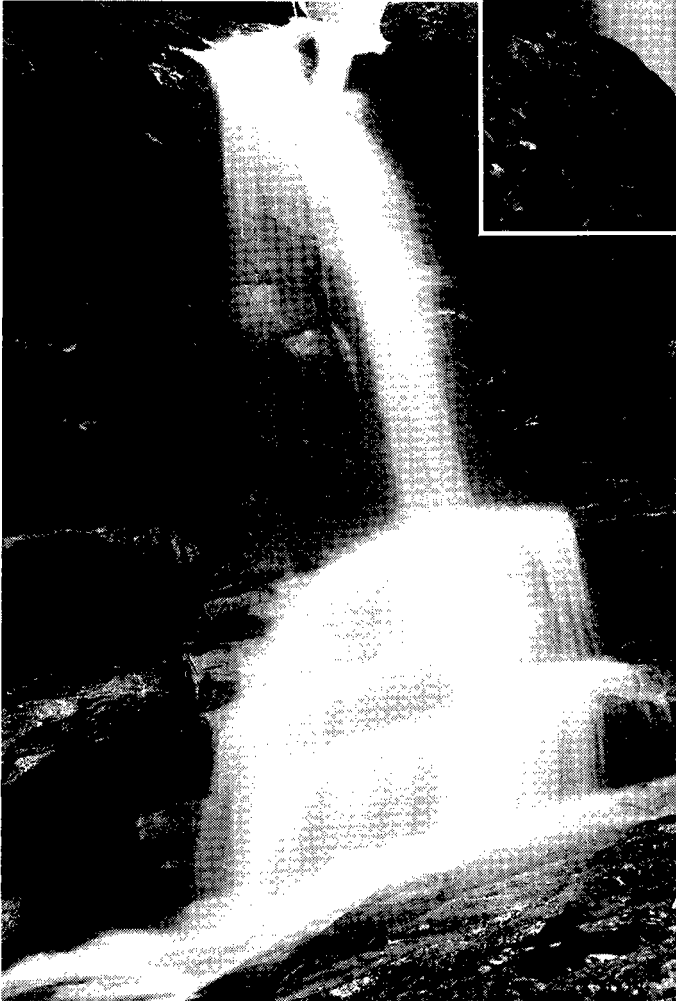
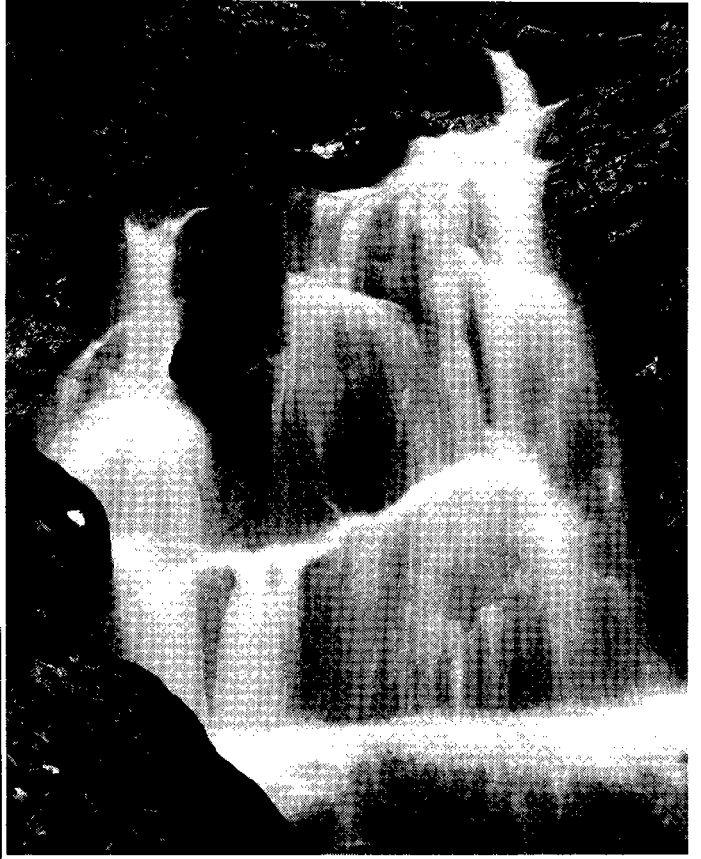


妙見五段の滝
(上流部)



妙見五段の滝

無名滝

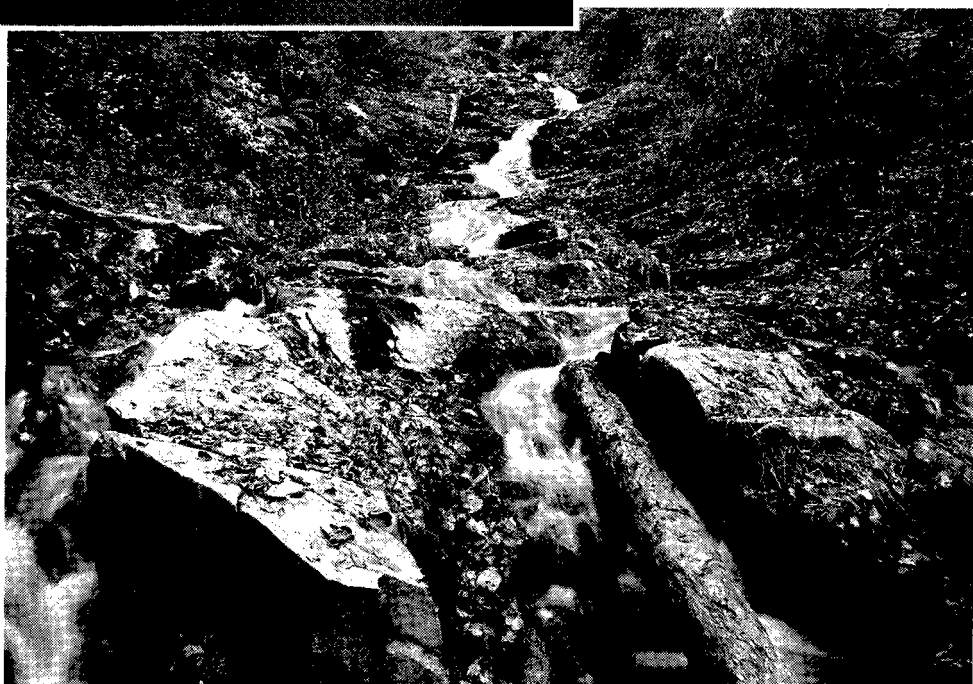


無名滝

小菅川源流



小菅川源流

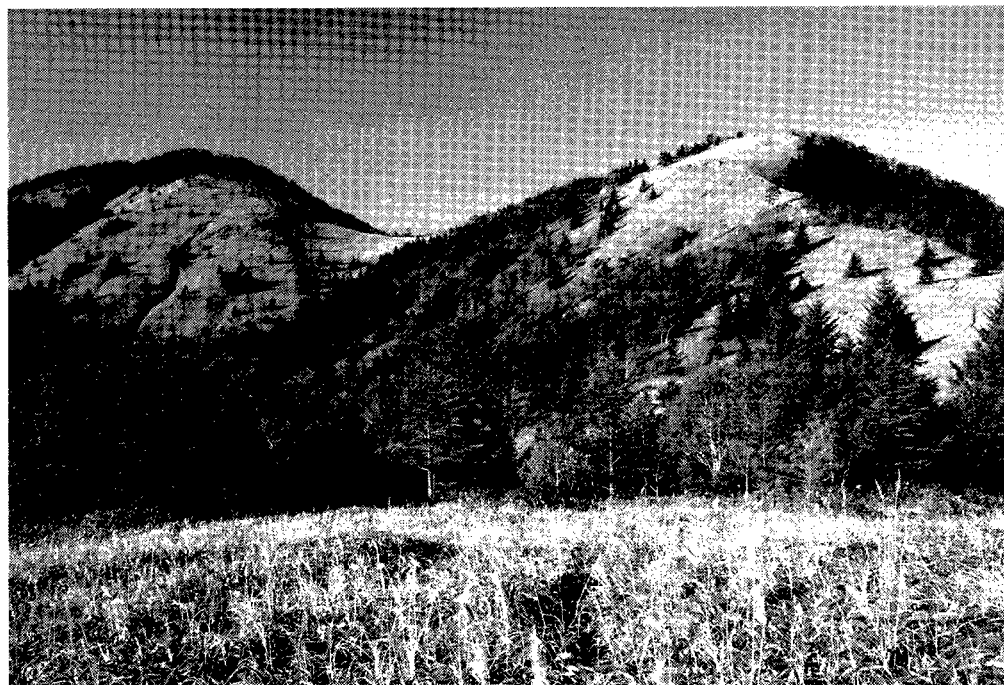


小菅川源流

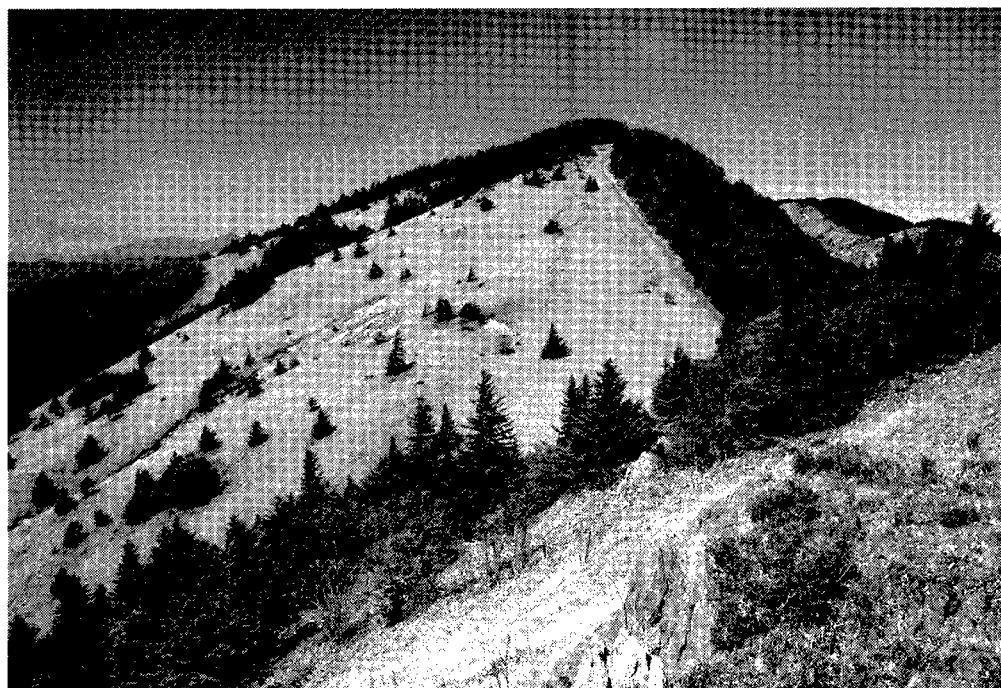


源流の山々
(天狗の頭から狼平)





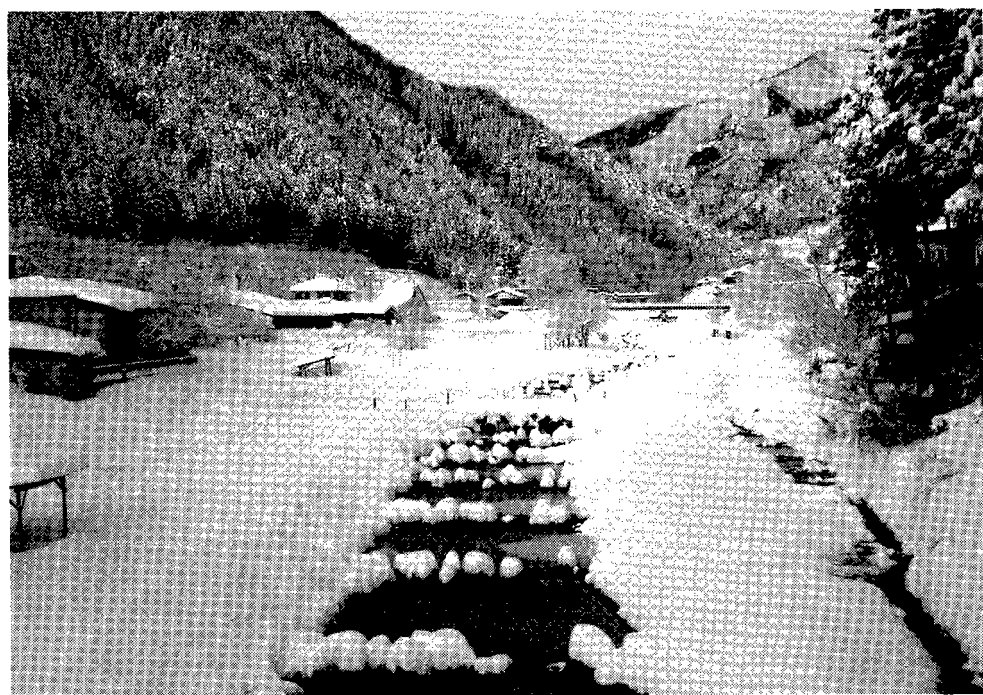
源流の山々(左…熊沢山、右…天狗の頭)



源流の山々(正面…熊沢山、右奥…大菩薩嶺)



雪の小菅村



雪の小菅川



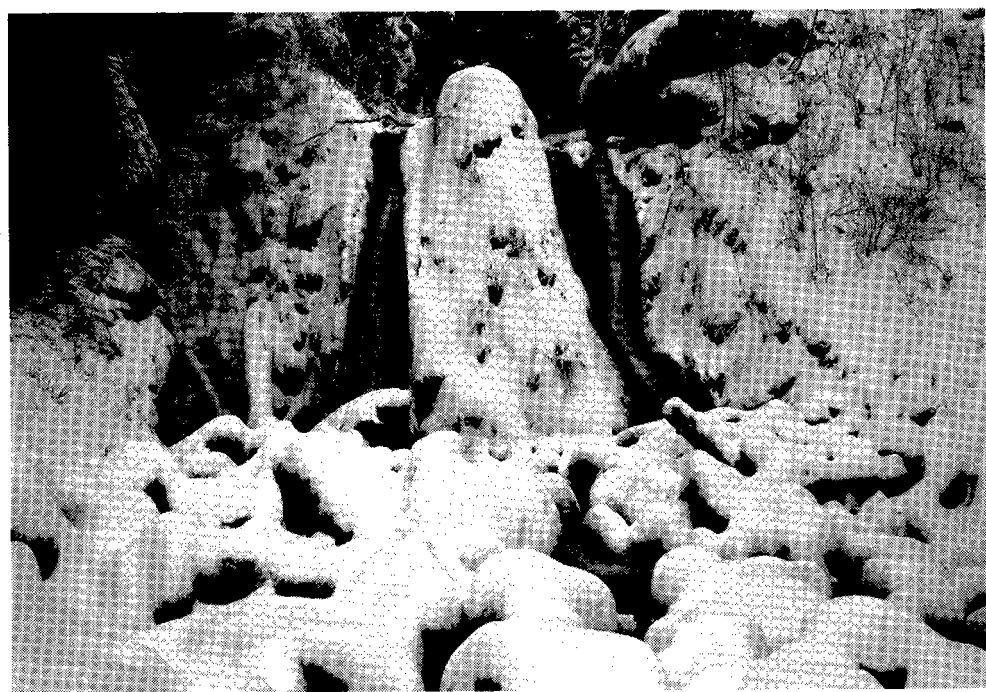
源流のツララ(赤ドチ沢)



雪の源流



雪の小菅川源流



雪の雄滝



雪の小菅川源流



雪の源流

〔 資 料 2 〕

多摩川

小

源

菅



妙見五段の滝(小菅川)

Eiko Shinji

流

版

絵

多摩川源流部の滝や淵、沢や尾根、 小字などの名称とその由来

多摩川源流部は、広大な都水潭に覆われ、手かずの自然景広絶に残されている。急峻な山々や渓谷の織りなす変化に富んだ地域は、四季折々の美し景観をつくり出している。この大自然流域全体の貴重な至あり共有の財産である。我々は、この多摩川源流部の自然、文化、歴史等の資源に注目し、その調査、研究とデータの蓄積、情報の収集と発信、源流と流域との交流事業の推進などに取り組んできた。源流域の滝や淵、尾根の聞き取り調査記録保存事業を目的として、九九九年に発行した「多摩川源流部絵図」道山、川渡山版は好評を得たが、今回その第二版である「多摩川源流部絵図」小菅版を作成した。調査や製作にあたり、地元小菅村の方々をはじめ、とうきゅう環境浄化財団、イラストレーターの進士絵里子さんなど多くの個人、団体に大変お世話になった。心から感謝したい。

多摩川源流部研究所 所長 中村 文明



図

発行：小菅村・多摩川源流部研究所 2002年5月1日
企画・製作・写真：多摩川源流部研究所 中村 文明
校閲担当：多摩川源流部研究所 石川 直人
イラスト：進士絵里子 印刷：サンニチ印刷

多摩川源流部研究所 山梨県北都留郡小菅村4383
電話：0428-87-7055 ファックス：0428-87-7057
ホームページ：http://www.tamagawa-genryu.net
Eメール：genryu@mx.cosmo.ne.jp

森と清流の村・小菅

《橋立》

●中河原

小菅川は昔暴れ川であったが、今も中河原、下河原と呼ばれる地名が残っていることからその川原の広がり想像できる。

●天ノ久保

この山の地続きにこの天ノ久保はある。付近に八幡神社があることから天の文字を頂いたものと思われる。久保は窪みのことである。

●上の山

この畑を見上げると思わず息を呑んでしまうほどの存在感のある畑が続く。橋立の人々が利用する畑で、部落のすぐ上に位置した。1年中利用するので、親しみを込めて上の山と呼んだ。

●橋立

この地名の由来はいろいろある。昔この地区の特産として箸を産出した。作った箸を立てかけていたことから橋立と呼ばれた。さらに村のお不動を建てる場所を決めるのに箸を立てて決めたことからこの名が生まれたという。

●上割間

地元では、「カミナッチ」と呼ばれている。上割間は、土地の区分が線で引いた様に正確にほぼ同じ広さで整然と分かれていることから生まれた。

●中丸

地元ではこの地名はあまり知られていない。地元では、この一帯を「ニイジャヤマ」と呼んでいる。

●西沢

地元では「ニイジャー」と呼ばれている。橋立地区の西に位置した小さな沢が流れている場所である。

●清水

水の久保沢というきれいな水が流れている。この沢は西沢に合流する。

●竹ノカヤ

地元では「タケノケエ」と呼ばれている。この地は、深い切り込んだ地形を持つが、深い切り込みの谷を峽(カイ)ということからカイがケエに訛ったものと思われる。

●小仏

仏を葬る墓地のある場所から、この名前が生まれたと考えられる。

●小沢

小さな沢が流れている場所だが、地元ではこの沢は「ホツザワ」と呼ばれている。この沢は清水が流れていたり、伏流水となって沢が干し上がっていたりする。沢が干すことから「ホツザワ」が生まれたと思われる。

●甲斐渡戸

地元では「ケード」と呼び、甲斐の国(甲府)へ旅立つ出発点にあたる。櫛倉からシヨナメに出て、牛ノ寝を通り、石丸峠を抜けて甲府へ向かった。

●田口

わさび田がこの入り口にあることから、この名前が生まれたものと思われる。

●川入

「カワイリ」と呼ばれ、小菅川の上流部にあたる。雄滝は、昔魚止めの滝と呼ばれており、この滝から上流は踏み入る人もいなかった。今は都の見事な水源林が広がっている。

●橋立向

橋立地区の向かい側の山の斜面。

●鱈沢

尾根が鱈の形をしていることから、鱈沢と呼ばれている。地元では、鱈尾根のことを「クジラオ」と呼んでいる。

●菅平

植物の「菅」が一帯に自生している平地があることから、この呼び名が生まれたのであろう。

●渡茶ア

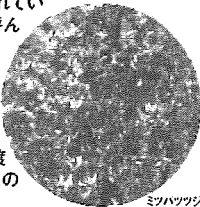
昔、川を渡って仕事に通った。地元の言葉・「渡っちゃあ」からこの名が生まれたのであろう。この地に今は「希望の館」が建てられている。



フツフネウ



レンジョウマ



ミフハツツ

《長作》(長作・森)

●鶴峠

鶴川の源頭で昔、西原村大羽峠から遠望すると、鶴が羽を広げた姿に見えた事からこの名前が付いたという。また、この峠道は、カヅラの蔓のようにくねくねと曲がっていたことから「ツル峠」と呼ばれ「鶴峠」に変化したともいわれている。

●栗山

昔、この一帯は多くのクリヤナラの木で覆われていたため、栗山と呼ばれた。一時、開拓され畑として利用された時期もあった。

●奥ノ茅

茅葺き屋根の茅をかるための茅畑があった場所。南向きの大きな畑があり、長作の茅葺き屋根の葺き替えには、この茅が利用された。

●コヤケ

地元では「小谷毛」の漢字が当てられている。鶴川の源頭に位置する小さな谷からこの名が生まれたのであろう。この谷は昔から地元の人々にとっては、恵みの谷であった。

●御堂街道

長作観音堂に通じる道。村中から鶴峠を越え、ここを通過して観音堂にお参りした。地元では「ミクイト」と呼んでいる。

●神楽

この谷に長作観音堂の「古観音」と言われるところがある。ここに観音様が祀られていた時代には、豊をなくさめるための神楽舞が奉納されたのであろうか。

●神楽入

神楽谷の奥まった場所で、現在、観音様が祀られている。昔はこの観音堂が建てられていたという。育ち石があり、夫婦岩、観音滝(音無しの滝)、荷渡し場など昔の賑わいを偲ぶ地名が今も数多く残る。

●吉原

ここは昔、葦の育つ河原であったので「葦原」が繰起の良い「吉原」に転じたのであろう。

●牛飼

地名の由来に関しては、牛が出会ったところ、という意味の「牛会」が、「牛飼」に変化したものと思われる。地元では、「ウシガエシ」と呼ぶ人もいて、牛返し、つまり牛が会って引き返したことからこういう別名もある。

●大長作

三頭山から流れ下る長作地区で一番長い谷が、大長作谷である。このためこの地区を大長作と呼んだ。

●小米沢

米の収穫は少なかったため、小米沢の地名が付けられたといひ伝えられている。

●打越

昔、十文字に向かう人々が一休みするのに利用した小さな平地を中心にした場所をこう呼んでいる。昔は、タバコの火をつけるのに火打ち石を利用する人がいた。赤石を打ってタバコに火をつけて一服し峠を越えた逸話からこの地名が生まれたという。

●倉骨

倉骨耕地は肥料のなかった時代、小菅村の一等地三ヶ所の一つに数えられた穀倉畑であった。穀倉が、倉骨へと変化したとも考えられる。

●長作

昔、農耕文化が広がりはじめたころ、この谷が農耕の中心地になったと思われる。長い谷と耕作場とが絡み合っ「長作」という地名が生まれたのであろう。

●前原

ここでは、神楽入が基準となり、神楽入の前にある平らな土地を前原と呼んだ。長作では、この神楽入と御魔神社が集落の拠り所として大切な位置を占めている。

●前原上

前原の山側の高い場所を指して、前原上という。

●森向

森向は御魔神社の森が基準となり生まれた地名である。御魔神社の向かい側にあたるので、こう呼ばれるようになった。

●森の上

御魔神社の森の上の方にある土地。

●井戸沢

井戸沢は自然の流水を利用し、数戸が井戸水の如くに利用していたことから、この名前が付いた。

●秋切

昔、山仕事といえば炭焼きか焼き畑、材木の切り出しなどが主であったが、この土地は、日陰の所も多く、炭焼きも焼き畑も秋までで仕事を切りあげるから、秋切と呼ばれた。

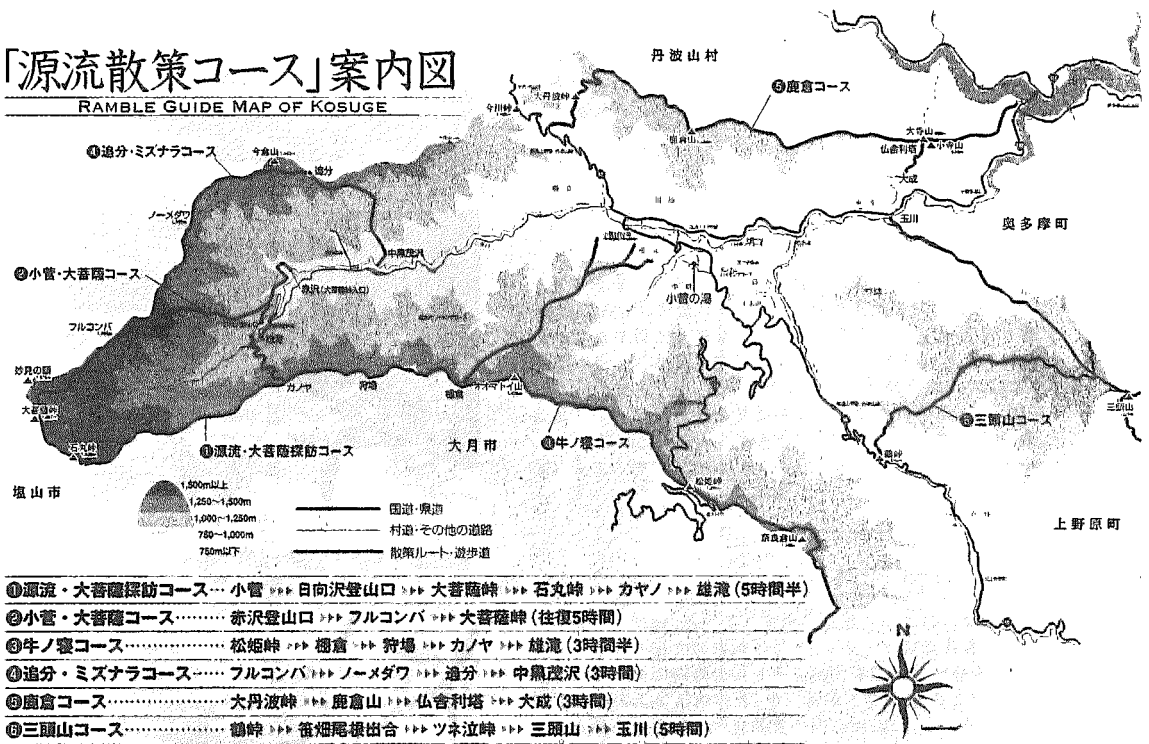
源流大菩薩探訪の旅

多摩川源流研究所は、源流と流域との交流事業を進展させようと、「源流・大菩薩探訪の旅」や「源流古道・水源林体験の旅」、「源流体験教室」を企画推進している。また、ともに源流の自然環境を保全し、源流の良さを広めることを目的とした「多摩川源流ファン倶楽部」を結成して会員を募集している。

- 「源流・大菩薩探訪の旅」 ……春～秋まで実施
- 「源流古道・水源林体験の旅」 ……毎年夏にA、B、Cコースに分けて実施
- 「源流体験教室」 ……親子を対象とした源流体験の最適コース
- 「多摩川源流ファン倶楽部」 ……特典あり・会員募集中

「源流散策コース」案内図

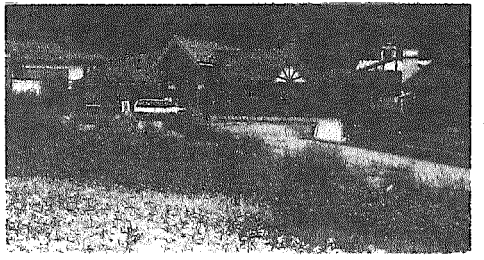
RAMBLE GUIDE MAP OF KOSUGE



- ①源流・大菩薩探訪コース…小菅 →日向沢登山口 →大菩薩峠 →石丸峠 →カヤノ →雄滝(5時間半)
- ②小菅・大菩薩コース…赤沢登山口 →フルコンバ →大菩薩峠(往復5時間)
- ③牛ノ寝コース…松姫峠 →榎倉 →狩場 →カノヤ →雄滝(3時間半)
- ④遊分・ミズナラコース…フルコンバ →ノメダワ →遊分 →中黒茂沢(3時間)
- ⑤鹿倉コース…大丹波峠 →鹿倉山 →仏舍利塔 →大成(3時間)
- ⑥三頭山コース…鶴峠 →笹畑尾根出合 →ツネ泣峠 →三頭山 →玉川(5時間)

多摩源流 山菅の湯

多摩源流の大自然に抱えられた「小菅の湯」。自慢の施設にハーブも植えられ、さらに充実いたしました。また、村内の特産物を販売する「小菅村物産館」も隣接して開館。小菅の魅力をご堪能ください。



〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村3445番地
☎0428-87-0888 ☎0428-87-0926
ホームページ <http://www.vill.kosuge.yamanashi.jp>

施設名	電話/ファックス	収容人数
小菅の湯	TEL 0428-87-0888	
廣瀬屋	TEL 0428-87-0235 FAX 0428-87-0922	150名
かどや	TEL 0428-87-0218 FAX 0428-87-0153	120名
亀井屋	TEL 0428-87-0216 FAX 0428-87-0217	100名
古家	TEL 0428-87-0706	60名
すずめのお宿	TEL 0428-87-0937 FAX兼用 0428-87-0483	50名
民宿かとう/加藤養魚場	TEL 0428-87-0475	60名
杉田屋	TEL 0428-87-0443	50名
山水館	TEL 0428-87-0533	50名
あおやぎ屋	TEL 0428-87-0346	30名
大嶺荘	TEL 0428-87-0429 TEL 0428-87-0206	50名
船木民宿	TEL 0428-87-0692 TEL 0428-87-0517	50名
玉川キャンプ村	TEL 0428-87-0601	400名
平山キャンプ場	TEL 0428-87-0156 予約専用 090-3342-2050	500名
東部森林公園	TEL 0428-87-0435 TEL 0428-87-0741	200名
原始村	TEL 0428-87-0803 TEL 0428-87-0741	70名
寺子屋自然塾	TEL 0428-87-0055	50名

お問い合わせ先 小菅村役場:TEL 0428-87-0111 小菅村観光協会:TEL 0428-87-0741

多摩川源流の四季

源流に夢とロマンを求めて

源流・ミニミニ辞典

東京都水源林

多摩川源流は都民のための水を生み出す水源林に覆われている。東京都は明治34年(1901年)に水源涵養林の経営に着手し、現在の水源林の面積は、21,635ヘクタールに及ぶ。塩山市5,628ヘクタール、奥多摩町7,791ヘクタール、丹波山村6,596ヘクタール、小菅村1,620ヘクタールである。清浄な水道水を確認し、洪水や土石流から住民の命を守るために、今から百年も前に、広大な山林を買収して水道水源林の経営を開始した当時の為政者の先見性と決断力には感服する。この水源林は、日本で最も優れたものの一つである。

ヤマメの里・小菅村

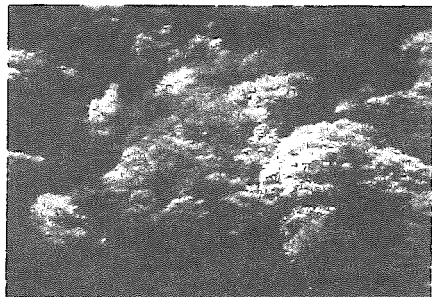
森と清流の村小菅では、昔から源流の資源を活用した産業が営まれてきた。ヤマメやイワナ、ニジマスなど溪流魚の養殖とワサビ栽培がそれである。溪流魚の女王と称されるヤマメはその体側に小さな斑点と鮮やかなバーストを身につけ最も美しい魚の一つである。生息環境は水温の低い清流に限られており、水温が18度を超えると食欲をなくす。ヤマメは孵化から3年でその一生を終える。小菅村の酒井 嵩さんは早くからヤマメの人工孵化に取り組んだ。幾年かの失敗の後、民間では最も早く人工孵化に成功した。小菅村では昭和40年以来ヤマメの養殖が盛んになり、今では村の主要な産業に成長している。

長作観音堂と御鷹神社

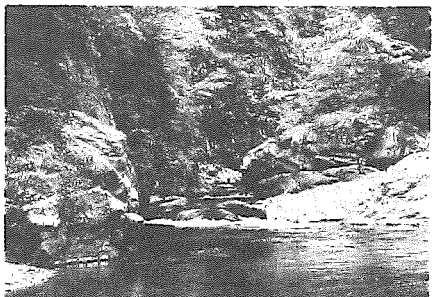
小菅村は多摩川と相模川の二つの源流に恵まれている。相模川水系鶴川の最上流部に小菅村の長作地区があるが、ここは独自の文化を守り続けている。小菅村の中心と長作地区は標高856メートルの鶴峠で分けられており、小菅村が多摩川流域との結びつきが強い中、長作地区は上野原など鶴川流域との交流が盛んである。この地に国の重要文化財に指定された鎌倉時代の建築様式による繊細で優雅な姿をした長作観音堂がある。同種の建築様式は愛知県吉良町の阿弥陀堂にみられるもので、全国でも珍しい貴重な文化財である。この観音堂のすぐ近くに御鷹神社があるが、モミヤケヤキの巨樹に覆われた鎮守の森はムササビたちの格好な住処になっている。

熊と天狗と狼

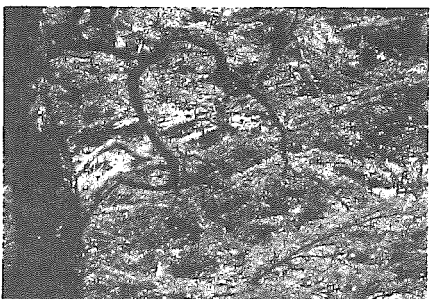
小菅川の源頭は、大菩薩の妙見の頭(標高1,975メートル)であるが、小菅川の源流は、賽の河原、親不知の頭、大菩薩峠、熊沢山、石丸峠、天狗の頭など2,000メートル級の山々に囲まれている。小菅村で最も標高の高い山は熊沢山(1991メートル)であるが、源流域の動物界の頂点に立つ熊に因んだ名称がつけられている。この山の正面に天狗の頭がある。小菅川の支流、天狗棚沢を上り詰めたところであるが、天狗の頭から狼平に続く草原の景観は、いつも心を和ませてくれる。ここは熊と狼の仲を天狗がとりもつ素敵なゾーンである。



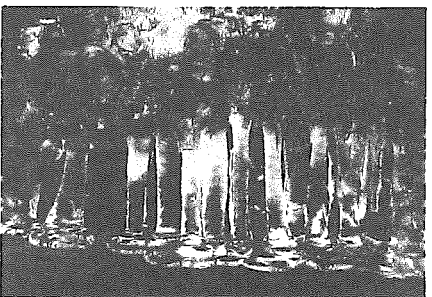
新緑の小菅川源流



小菅川・虹石の清流



雄滝付近の紅葉(11月上旬)



神秘的な源流の水柱(小菅川)

地名その由来をたどる旅 小菅川

⑥ツリガネ洞 泉湧の山腹にあった小寺の跡がここ大きな洞で見つかったことからツリガネ洞と呼ばれた。今は、小菅内ガムの建設に伴い水没したため洞を見る事が出来ない。

⑦チンゴウ洞 洞窟が狭く通った地形の端と岩の間に、大きな流を巻く異様な洞があり、チンゴウ洞とよばれたが、天狗洞が変化したと思われる。ここを通過するには、岩を登るヘソリなから通過したという。

⑧十二天 大菅、名目地区には、昔から文化的な香湯を流る人々が多く住んでいた。いる大菅、名目地区は、個人の排もいれば、地区共通の排もいたという。この十二天には、十二位を供養する堂宇があったが、今は大洞に移動した。

⑨新藤場ノ洞 昔、洞を穿けて通っていた場所のすぐ近くにあって、新玉川橋の下流に当たる。

⑩越ノ洞 昔、高いケヤキの一本木が玉川橋の所に際かっていた。その横のすぐ近くの岩に釜の形をした穴がいて、その場所のすぐ下に洞があった。

⑪ウハガフトコロ 洞の窟のように日当たりがよく暖かい場所。舟渡山にも同じ地名がある。

⑫稲洞 洞のすぐ上に見事なビワの花を咲かせる桜があった。この桜は村人に農作物の開始を告げる目印にもなっていた。この桜は今はない。

⑬岩間洞 洞の上の横溝公一さんの近くに富士橋の碑が建っていることからこの洞の名は横溝神社にちなんで付けられた。

⑭岩間洞 名目地区の下流にある洞。今は橋脚工事でなくなつたが、富士橋に出かける信者がここですばやく通ったことから「ヨロギ洞」と呼ばれた。

⑮ヤマムシノ洞 洞に流れこんだ川が大きく巻いていることからこの名が付けられた。

⑯神おじノ洞 近くの子供が夏になると涼い洞。深くは底は砂がたまっている水汲りに最適な場所だった。この洞の上には梅田おじさんが住んでいた。

⑰オネツコロ洞 明石の終わりの大洪水の時、ケヤキの大木の根がこの洞に流れ落ちたことから、オネツコロ洞と呼ばれた。二ガツハヤなどの小魚がウヨウヨ泳ぎ回っていた。

⑱蛇石 洞がうづもれる岩場から、深い名目が伏している。右側は横溝で左側には大きな岩がごろごろしている。蛇の目と似た形をした岩が主眼にあることからこの洞と呼ばれるようになった。

⑳白河出合い洞 小菅川と白河が合流するところに深い洞がある。大きなヤマが横たわってよく歩人が歩ける。

㉑白河洞 白河川を流り始める二段の洞に出合う。滝壺付近は、ぬじれた形状が散くので、正面から流るの全体を眺めることは難しいが美しい洞である。

㉒ヤチダウの洞 ヤチは「谷」つまり狭く割られた谷とか、谷油いの湿地を意味したものと考えられる。ヤチダウの洞の形状は、洞の幅が狭くなるように谷で洞の岩がえぐり取られていて、この洞の誕生がきっかけとなり大地に転換された。

㉓平山洞 平山キャンプ場のすぐ下にある洞。左右に大きな岩を配し深い洞をもったこの洞は、大物のヤマの住処になっている。

㉔ドウトコロ洞 井戸との出合いにある洞。ドウトコロ洞は地名からきている。これは、子供の嫌好所である。洞には大きな岩があり、子供達はこの岩から飛び込んだり、洞に潜ったりして遊ぶ。

㉕せがり洞 洞をくりぬく。川の流れる岩にカーブした地形に生まれた洞からその名が付けられている。ここにあって大きな岩から子供達はこの洞に飛び込んで遊んだ。

㉖岩洞 大菅地区にお祭りと呼ばれる事がこの深い洞にはまて祭りとした。地元では「お祭り」と呼んでいた。昔は子供達の水遊びの格好の場所だった。

㉗平井屋敷から生まれた洞。御門が崩れに連れて穴を崩れ、その穴がこの洞の洞に崩れておまつり花が咲いたの言い伝えによる。

㉘三本殿洞 酒井屋敷のすぐ下にある洞で、右岸に大きな岩が回り出し小さを流し込みを持つ洞である。最近は大菅で岩に埋まり深くなっている。

㉙せごり洞 富士橋の信者の身を濡める場所としても利用されていた洞で、「チンゴウ洞」とも呼ばれていた。

㉚岩洞 沢の出合いにある洞である。この洞のすぐ上に湧き出した中州がある。洞下には中州の左右を流れる其のどちらかを堰き止めて魚を捕る方法である。

㉛一ツ岩洞 大菅地区と呼ばれている。「昭和4年11月内務省東京事務所、流注70メートル。洞の深さ約1メートル。」と測り打たれている。(他に12ヶ所に深さがある)

㉜山の神洞 山の神が祀られているすぐ下の洞。洞の南側の洞の出で木を切り出すと事故が多発するので「だたり山」として恐れられていた。そこで山の神を祀り、仕事安全を祈ったという。

㉝洞出合い洞 都賀岩との出合いにある洞。細くて深い洞は、洪水で深くなった洞をたたりを繰り返す。

㉞ナガト洞 洞が深く深い洞。ここからナガト洞、おつ洞、丸洞の3つの洞が連なっていた。水車が建設が出来た関係で全体として深くなっている。

㉟せごり洞 洞のすぐ下にある洞。右側にベンチと岩と呼ばれる大きな岩がある。のぞき込むと深い洞に落ちた洞だった。

㊱丸い形の深い洞。谷底は大きな岩に覆われていた。

㊲越平洞 五基目の洞で昭和5年7月30日に完成した。内務省東京土木事務所が測り、深さは809メートル、高さ12メートルとされている。

㊳白糸の洞 38メートルの深さを持つこの洞は、小菅川の流の中で最も深い洞である。高い絶壁から自ら水となって一気に流れ落ちる洞は、動ける者を驚かすついでやまない。

㊴能所出合い洞 赤沢との出合いからや下ったところにある。早期の下に出来た洞で右岸の崖を削るようして出来た洞である。

㊵たわなれ洞 洞のすぐ下には一ツ岩洞になっていて足でも滑り、鹿やサルなどの動物が身を隠しと隠れる格好の地点であり、よく小動物を見かける。

㊶のぞも洞 垂のように丸く深くくぼれた洞。この洞から三本に分かれて流れる小さな洞がある。昔々洞んだ洞は美しい。

㊷たわなれ洞 矢下下流出合いから少し下ったところに、長方形をした洞窟を深い洞がある。いかにも天然の山女がいてその姿を覗くと聞かなくなる。

㊸洞窟 矢下下流の谷流地点から少し上流に流むと、丸くて深い洞に出会う。深き洞は深ければキラキラと輝き芳れを知らない子供達の目に映っていることからこの名前が付けられた。

㊹小菅出合い洞 小菅川と鳥小菅川の出合いにある洞で洞の正面にシンジの巨木がある。この洞は横溝が心ごとく丸くくぼれた洞で、小菅で最も大きな洞である。

㊺無名洞 (鳥小菅洞) 鳥小菅川の正面にある洞である。鳥小菅川は、鳥小菅川出合い洞から流れて小菅川としばらく併走し、少し下流で本流と合流する。この洞の目の前には小さな洞窟になっているのだからこの洞である。

㊻無名洞 鳥小菅洞から少し上流に流むと、深さは少ないが奇麗な洞になって流れる洞がある。洞窟は算々として深く覗きこむ。

㊼妙見五段の洞 フルコンパの出合いのすぐ下に、五段になって流れる見事な洞がある。小菅川を代表する洞のうちのひとつで、妙見五段の洞頭である妙見の頭の名を取り、妙見五段の洞と呼ばれている。

㊽無名洞 妙見五段の洞を少し下ったところに、名前のない美しい洞がある。

㊾無名洞 (天狗洞) 天狗洞代が小菅川に合流する付近に二つの洞が連なっている。どちらとも無名洞であるが、上流の洞は20メートルを超えて見事な洞である。

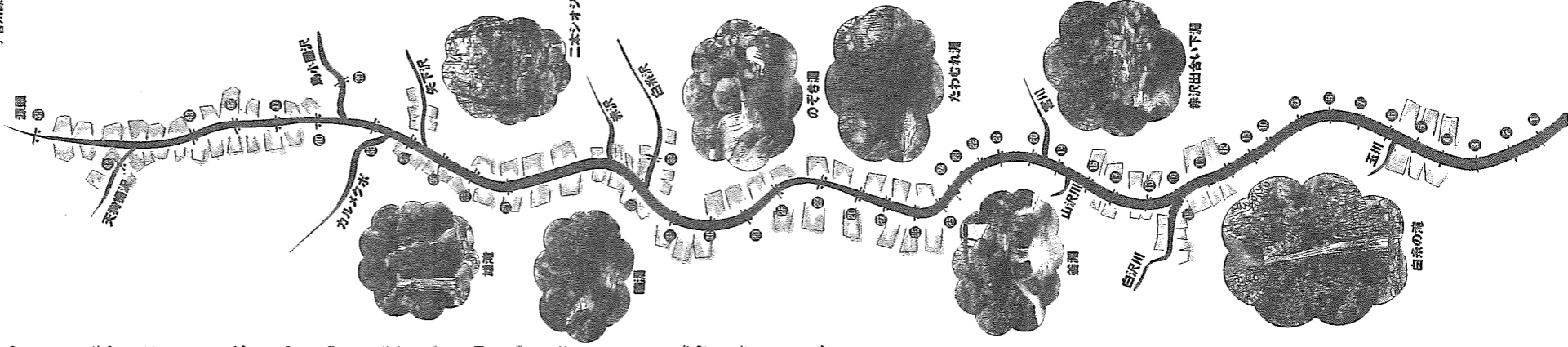
㊿観音洞 小菅川の洞頭は、大菅橋の中央に盛える妙見の頭 (標高1976メートル) である。妙見の頭に降った雨は大地に浸透し洪水となり、この観音岩から球を押し、一糸の流れて下った洞である。最も深い観音洞の洞である。ここから小菅川は誕生する。

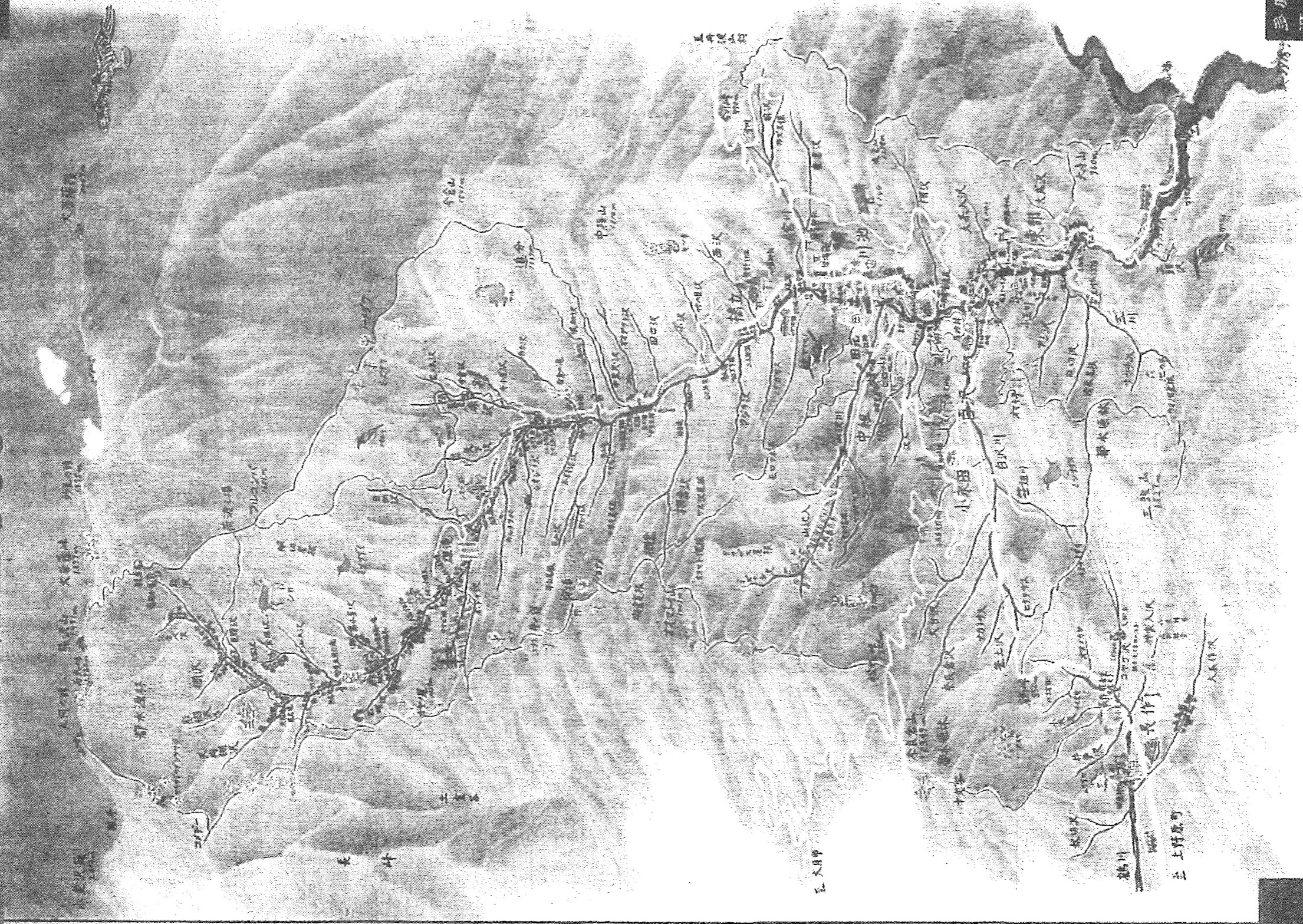


カモシカ立ち付近



小菅川源流





▲多摩川源流繪圖小管版

「^たまが^がわ^げん^りゅう^ぶ ^ふち ^たま ^さわ ^おね^{とう} ^ちめい
多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の地名と
その由来に関する調査・研究」
^ゆらい ^かん ^ちよう^さ ^けんきゅう

(研究助成・一般研究VOL. 24—No.139)

著者 ^なか ^むら ^{ぶん} ^{めい}
中村文明
発行日 2003年3月31日
発行 財団法人とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002

渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141
